Saeki, Umetomo
Kokugoshigaku Joko
no kokugo

国語史学

上古の国語

佐伯梅友

國語科學講座

— V —

國語史學

上古の國語

佐伯梅友

株式會社
明治書院

國語科學講座

—V—

國語史學

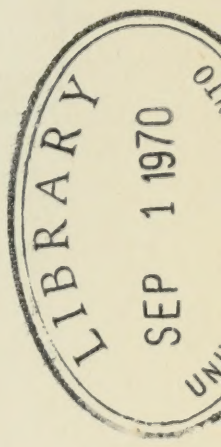
上古の國語

佐伯梅友

株式會社

明治書院

目次

一 文字……………………………〈三〉
二 歌語……………………………〈六〉
三 音韻……………………………〈一〇〉
四 外來語…………………………〈二〇〉
五 東國方言………………………〈三三〉
六 敬語……………………………〈三九〉
七 男女の言葉……………………〈五三〉
八 代名詞…………………………〈六五〉
九 形容詞…………………………〈七八〉
十 動詞……………………………〈八三〉
十一 助動詞………………………〈九二〉
十二 助詞…………………………〈一〇四〉

上古の國語

佐伯梅友

「上古の國語」と題にはあるものの、今の私としては專ら萬葉集について述べる以外には出來難いことをまづお斷りしたい。それも新研究といふものでは勿論なく、諸先輩が種々の方面から研究せられた事を、とりまとめて見るだけのことであつて、それさへ、ゆつくりと考へまとめる時間が得られないので、不十分な點見苦しい點はさぞ多からうと思ふ。私はこれがほんの初心の方々が、或は上古の國語の大體を見ようとせられる時、或は萬葉集に入らうとせられる時、何等かの參考になりうるならばと願ふばかりである。

一 文字

まづ上古の國語はどんな文字で記し殘されてゐるか。勿論吾々が現在用ひてゐるやうな平假名・片假名などはまだ無かつた時代であるから、漢字ばかりで記されてゐる。その漢字も、例へばヤマ・カハといふ語をあらはすに(一)山・川(二)夜麻・可波の如く二樣にあらはされる。(一)は漢字をその本來の意味に用ひたもので、現在も行はれてゐる。(二)は漢字のもつ意味をすてて、その發音だけをかり用ひたもので、世に萬葉假名と言はれるものであるが、これが

また頗る複雑である。その詳細は遠藤嘉基氏の「萬葉假名の研究」に譲り、ここにはごく大體のところを記して見よう。

A　漢字の音をかりたもの

a　一字音によつて一音をあらはしたもの……夜麻《ヤマ》（山）・可波《カハ》（川）の類

b　字音の一部によつて一音をあらはしたもの……安米《アメ》（雨）・散久《サク》（咲く）の安《ア》・散《サ》の類

c　一字音によつて二音をあらはしたもの……難可将レ嗟《ナニカナゲカム》（何か嗟かむ）・獨鴨念《ヒトリカモネム》（一人かも寝む）の難《ナニ》・念《ネム》の類

B　漢字の訓をかりたもの

a　一字の訓によつて一音をあらはしたもの……卯管《ウツツ》（現）・須十《スソ》（裾）の卯《ウ》・十《ソ》の類

b　字訓の一部によつて一音をあらはしたもの……好常言師《ヨシトイヒシ》（よしと言ひし）・吾戀目八面《ワレコヒメヤモ》（吾戀ひめやも）の常《ト》・面《モ》の類

c　二字の訓によつて一音をあらはしたもの……五十日太《イカダ》（筏）・嗚呼兒乃浦《アゴノウラ》（英虞の浦）の五十《イ》・嗚呼《ア》の類

d　一字の訓によつて二音以上をあらはしたもの……相見鶴鴨《アヒミツルカモ》（相見つるかも）・卯管《ウツツ》（現）慍《イカリ》下《オロシ》（碇下し）の鶴《ツル》・鴨《カモ》・管《ツツ》・慍《イカリ》の類

これらの外に所謂戯書がある。例へば猪鹿等のシシをあらはすに「十六」と書き、「欝悒《いぶ》せくもあるか」といふを「馬《イ》聲蜂音《ブ》石花《セ》蜘蛛《クモ》荒鹿《アルカ》」と書き、「色に出でば」といふを「色二《イロニ》山上復有山《イデ》者《バ》」と書く類である。「十六」は四四十六であり、「山上復有山」は出の字形を山を重ねたものと見たのである。また「馬聲」をイにあてたのは、當時は馬のなき聲をさう聞いたのであつて、イバユ・イナナク等のイもそれであらうと思はれる。石花は俗に龜の手と稱する貝のことで、

古名をセといふのである。

右は萬葉集の例である。古事記・日本書紀の歌謠なども皆右のAのまの音であらはされてゐるけれども、日本書紀に於ては、

阿軻娜磨（赤玉）・拖摩儺羅麼（玉ならば）

介耆茂等珥宇惠志破餌介彌句致弭比倶（垣もとに植ゑし薑口疼く）

の如く畫の多いむづかしい漢字を使つてゐるばかりでなく「麿」を「マ」「バ」に、「珥」を「ニ」「ヒ」といふやうに、二樣に用ひたものが多くある。古事記にはかういふ例はない。萬葉集でも、

三笠社之神思知三（三笠の社の神し知らさむ）（四・五六一）

良人四來三（良き人よく見つ）（一・二七）

の「三」のやうに一字を種々に用ひる事は多いけれども、同じく字音をかりての假名では、二樣の音をあらはすものは殆どない。

婦負の野の 薄 於之奈倍（押し靡べ）零る雪に宿かるけふしかなしく於毛倍遊（思ほゆ）（十七・四〇一六）

麻都呂倍奴（服從はぬ）人をも和し掃き清め都可倍麻都里弖（仕へ奉りて）（二十・四四六五）

の「倍」の如きは、例外とも見るべきものである。

さて上代の國語資料としては、右の如き假名で書かれたものがそれに當るべく、漢字をその本來の意味に於て用ひたものは資料とすることが出來ない。從つて數ある上代の文獻の中に、資料としうる部分はいくらもないといふこと

になる。今ここに主として資料をとらうとする萬葉集に於ても、本當に假名書を主としてゐるのは、二十卷中、卷五・十四・十五・十七・十八・二十の六卷程に過ぎない。かういふ狀態であるから、今ここに述べようとするのは、當時の國語の全部の姿であるとは勿論いひえないのである。

二　歌　語

萬葉集の歌には、助動詞「つ」の連體形「つる」をあらはすに、

　山の邊の御井を見がてり神風の伊勢をとめども相見鶴鴨(アヒミツルカモ)（一・八一）

の如く「鶴」の字を用ひた例は澤山あるが、鳥の名として「つる」といふ語を用ひた假名書の例は見當らない。では何といつてゐるかといふに、皆「たづ」とあるのである。卷六「九六一」の歌は、題詞には

　帥大伴卿宿次田溫泉聞鶴喧作歌一首

とあるが、歌の方には

　湯の原に鳴蘆多頭者(ナクアシタヅハ)わが如く妹に戀ふれや時わかず鳴く

とあり、「多頭」と假名書にしてゐる。しかしこれは「蘆たづ」といふ語であるから特別だともいはれようか。けれども、

　天雲に翼(はね)うちつけて飛鶴乃多頭多頭思鴨(トブタヅノタヅタヅシクモ)君いまさねば（十一・二四九〇）

の「飛鶴乃」は、下の「たづ〳〵し」を出す關係上どうしても「とぶたづの」と訓まねばならぬものである。かくの如く、一つには假名書の例がなく、一つには「鶴」と書いても「たづ」と訓むべきやうになつてゐる場合があるので、この他の

場合でも、鳥の名としての「鶴」字は皆「たづ」と訓まれてゐる。それでよいのだと思はれるが、してみると當時は「つる」と「たづ」と二つの語があるにもかかはらず、歌には「つる」は用ひられなかつたといふ事になるのであつて、歌にはどんな言葉でも用ひた譯でなく、或る選擇が行はれてゐたことになるのである。

「かへる」といふ語もあつて、

こもち山和可加敝流氏能(ワカカヘルデノ)紅葉(もみ)づまで寢もとわは思ふ汝はあどか思ふ（十四・三四九四）

の「かへるで」といふのを、

吾がやどに黄變(モミヅ)蝦手(カヘルデ)見る毎に妹をかけつつ戀ひぬ日はなし（八・一六二三）

の如く「蝦手」と書いてゐる。その「蝦」は、巻十「二一六一」の「詠蝦」といふ題詞のある歌に、

み吉野の石もとさらず鳴川津(ナクカハヅ)うべも鳴きけり河をさやけみ

とあつて、題詞の「蝦」は歌の「川津」にあたることが考へられる。そして萬葉に「かはづ」といふのはすべて今いふ「河鹿」のことであるので、從來は「かへる」と「かはづ」とは別のものと考へられてゐたのであるが、澤瀉先生が、河鹿と蛙とは鳴聲は全然別のものと思はれるが、形は離れて見る時には極めてまぎれ易いものであるから、萬葉人は兩者を殆ど同じ動物と見てゐたのではなからうか、「かはづ」と「かへる」との言葉の區別も、實は同じものの異稱で、たまたま蛙の聲を詠んだ歌が無く、河鹿を詠んだ歌ばかりであつたために、「かはづ」が河鹿のみの名と思はれただけで、實は「つる」と「たづ」との關係の如く、古語と口語、歌語と俗語の區別にすぎなかつたのではなからうか、といはれてゐるのを、私は非常に面白く思ふのである。

たづ及びかはづについては、「國語・國文」第一卷第二號第三號の澤瀉先生の萬葉集選釋參照。

萬葉集の歌で推敲の行はれた確かな例は、卷十九に一つある。

白雪のふりしく山を越えゆかむ君をぞもとな伊吉能乎爾念（イキノヲニモフ）（四二八一）

この歌の左註に、

左大臣換尾云、伊伎能乎爾須流、然猶喩曰如前誦之也

とある。これは天平勝寶四年十一月二十七日に、林王の宅で但馬按察使橘奈良麿を餞しての宴に、大伴家持が詠んだもので、左大臣といふのは奈良麿の父諸兄である。でこれは萬葉集もずつと後の方の例ではあるが、これより以前でも推敲が行はれたであらうと想像することは無理でなからうと思ふ。卷一「二九」の柿本人麻呂が近江の荒都を過ぎての歌にある「或云」は、異本の攷異といふよりは、恐らく人麻呂自身が兩說を存したものと見るべきであらうと、澤瀉先生は言つてをられる。

「國語・國文の研究」第十號　詞章研究參照。

歌は音律の關係から、修辭的の關係から、普通でない詞遣ひをすることが多い。

淡海乃海（アフミノミ）　夕浪千鳥（ユフナミチドリ）　汝鳴者（ナガナケバ）　情毛思努爾（ココロモシヌニ）　古所念（イニシヘオモホユ）（三・二六六）

亦打山（マツチヤマ）　暮越行而（ユフコエユキテ）　廬前乃（イホサキノ）　角太河原爾（スミダカハラニ）　獨可毛將宿（ヒトリカモネム）（三・二九八）

の「夕浪千鳥（ユフナミチドリ）」や「暮越行而（ユフコエユキテ）」等のいひ方は、恐らく平生の言葉や散文などでは用ひぬ詞遣ひであらう。「寢夜（ヌルヨ）」（一・六）「秋山（アキヤマ）」（一・一六）「春野（ハルノ）」（一・五四）「朝川渡（アサカハワタル）」（二・一一六）「池浪（イケナミ）」（三・二五七）「棚無小舟（タナナシヲブネ）」（三・二七二）「和須禮豆於毛倍也（ワスレテオモヘヤ）」

（十五・三六〇四）等も歌のみに用ひる詞遣ひであらう。枕詞・序詞等はいふまでもなく歌にばかり用ひられる類のものであるが、さらにその枕詞は代用語として、「あしひきの」を「山の」の意に（八・一四九五）、「たらちねの」を「母の」の意に（十四・三三五〇或本歌）用ひる等のことも行はれる。語の順序をかへて、

わが命しまさきくあらばまたも見む志賀の大津によする白浪　（三・二八八）

といふが如きは歌としては平凡なことである。

阿乎夜奈義烏梅等能波奈乎（アヲヤギウメトノハナヲ）折りかざしのみての後は散りぬともよし　（五・八二一）

なども、推敲不足といふよりは、作者としてからういはねばすまぬところがあつたのであらう。普通には語法上許されぬいひ方である。

春柳縵に折りし梅の花誰か浮べし盃の上に　（五・八四〇）

も、梅の花を縵にすることは無いことだとして、吉澤先生は、

誰か｛春柳縵に折りし
梅の花盃の上に浮べし

の意に解釋せられ、我が亂醉忘我の態を歌つたもので、音律に支配された語序破格の好適例としてをられる。

とにかく歌には話語や散文に用ひられぬ特別な言葉が用ひられ、また語の順序をかへたり、語法上許されぬいひ方をすることもある。萬葉集に用ひられた言葉はすべてその時代に口語として話されてゐたといふものではなくて、一種の歌語であるといふことを思ふのである。

このことについては「萬葉集講座」第三卷所收吉澤先生の「國語史に於ける萬葉集の位置」に詳説せられてゐる。

三　音　韻

五十音圖は上代の國語の音を總括したものとして、例へば賀茂眞淵の語意考には、

此れの日出づる國は五十聯(イツラ)の音(コヱ)のまにまに言を成して、萬づの事を口づから云ひ傳へたる國なり。……天竺にはたとへば加行のみにも加我伎也加牟我牟伎也牟(カガギヤカムガムギヤム)の六つ有て合て三十音也。次にかくの如くの音を合せれば甚多し。此國には清音五十の外に濁音二十有のみにて甚言少し。その少きを以て千萬の言にたらはぬ事なきは妙ならずや。

と言つてゐる。けれども實際はどうか。そこには本講座「假名遣の研究」第四章第一節に記されてゐるやうな事實があるのである。例へばカ行に於てキ・ケ・コにそれぞれ二類の假名があつて混雜せず、且つ相應じてゐるといふことは、當然そこに發音の差別のあつたことが考へられるわけで、當時は現在の五十音圖にはをさまりきれぬ多くの音のあつたことが想像せられるのである。

漢字音の例へば男・信等の尾音なども、後世は區別せられてゐないけれども、上代の人は判然と區別が出來てゐたことも、その文字用法の上から察せられる。即ち唇內〔m〕舌內〔n〕喉內〔ng〕の所謂三內の鼻音を轉用するに當つて、唇內のはマ行に、舌內のはナ行に、喉內のはガ行にといふやうにして、その間に混亂がないのである。その地名に於ける例は本居宣長の地名字音轉用例に見られる。

男信　ナマ◦シナ◦　（上野の鄕名）

印南　イナミ。（播磨の郡名）
丹波　タニハ（國名）
讃岐　サヌキ（國名）
相模　サガム（國名）
愛宕　オタギ（山城の郡名）
香山　カグヤマ（大和の山名）

萬葉集に於ても、

荒栲の布衣をだに着せがてにかくや歎敢（ナゲカム。）せむすべを無み（五・九〇一）

うらぶれて離れにし袖をまたまかば過ぎにし戀い亂今可聞（ミダレ來ムカモ）（十一・二九二七）

散頬相（サニツラフ）色には出でず少くも心の中に吾が念名君（オモハナクニ）（十一・二五二三）

大君のみ笠の山の紅葉は今日の鐘禮（シグレ）に散りか過ぎなむ（八・一五五四）

音に出でて言はばゆゆしみ山川の當都心（タギツコヽロ）をせきあへにたり（十一・二四三二）

思ふにこの時代は支那との交通が多く、支那文や支那文字に對する有樣は、現在の吾々が英語などに對すると相似たものがあつたのであらう。從つて三內の音の區別なども明にあつたのであらう。けれどもかうした音が、はねる音として國語の中に古く存在したかどうかは問題で、恐らくは存在しなかつたものと考へられてゐる。後世ははねてよまれる助動詞の「む」も、前にあげた如く「歎敢（ナゲカム）」「亂今可聞（ミダレコムカモ）」などあると、はねてもよいやうに見えるが、また一方には

目には見て手には取らえぬ月の內の楓の如き妹を奈何責(イカニセム)（四・六三二）
　相見ては月も經なくに戀ふと言はばをそろと我を於毛保寒毳(オモホサムカモ)（四・六五四）
　わたの底沖つ白玉よしを無み常かくのみや戀度味試(コヒワタリナム)（七・一三二三）
など「む」とはつきりよむべき書き方をしたものもあり、また、
　高山の菅の葉しぬぎ零る雪の消(け)ぬとか曰毛(イハモ)戀の繁けく（八・一六五五）
　こもち山若鷄冠木(かへるで)のもみづまで宿毛(ネモ)と吾(わ)は思ふ汝はあどかも(も)ふ（十四・三四九四）
の如く「も」に轉じた例もあり、且つその已然形が、
　ささなみの志我の大わだ淀むとも昔の人にまたも相目八毛（一・三一）
の如く「め」となること等を思ふときは、やはりはねずに、「む」と發音せられたものと考へられる。けれども
　可美作夫流(ウミサブレ)生駒高嶺に雲ぞたなびく（二十・四三八〇）
　島の樹立も可牟佐飛仁家理(カムサビニケリ)（五・八六七）
といふやうな場合の、音便的なものと考へられるものは、或はそれほどはつきりしたものではなかつたらうとも考へられる。とはいへまた、神名火山はカムナビヤマとよまれてゐるが、
　味酒呼神名火山(ウマサケヲカムナビヤマ)の（十三・三二六六）
の如き枕詞との關係を思ふと、カムとはつきりよまれたものではないかとも思はれる。
　ハ行の古音が〔p〕であつたらうといふことは、現在では既に定說になつてゐる。その說は上田萬年博士の「國語のた

め第二十、金澤庄三郎博士の「日本文法論」、安藤正次氏の「古代國語の研究」、吉澤義則博士の「國語史概説」等に讓つて、ここには述べない。その〔p〕が〔f〕にかはり、更に〔h〕にかはつたもので、〔h〕が優勢になつたのは江戸時代も比較的後のことで、〔f〕の時代がかなり長かつたことが種々の方面から考へられるのであるが、萬葉集の時代には〔p〕であつたか〔f〕であつたか、これは遽に決定はし難いことである。ハ行とワ行との交通の例はあるやうである。日本書紀雄略天皇六年にある御製に、

こもりくの泊瀬の山は出でたちの宜しき山和斯里底(ワシリデ)の宜しき山の……

とあり、萬葉集卷十三には、

隠り國(く)の泊瀬の山青幡の忍坂(おさか)の山は走出(はしりで)の宜しき山の出でたちのくはしき山ぞ　(三三三一)

とある。そして萬葉集卷五に、

すべも無く苦しくあれば出波之利(イデハシリ)い往なナと思へど兒らにさやりぬ　(八九九)

とあるのをみると、ワシル・ハシル相通ずるものである。萬葉集卷十一に、

秋柏潤和川邊の細竹(しぬ)の目の　(二四七八)

とあるのと、同じく

朝柏閏八河邊の小竹(しぬ)の目の　(二七五四)

とあるのとは同じと考へられるが、この「閏八河」も「ウルハガハ」とよんで、今の例に入るものでは無からうか。「八」を「ハ」とよむ例は多くはないが、

古ゆ織りてし八多(ハタ)(服)を此の夕衣にぬひて君待つ吾を　(十・二〇六四)
如何にして戀止むものぞ天地の神を禱れど吾八思益(ワレハオモヒマス)　(十三・三三〇六)
四八津(シハツ)のあま(六・九九九)――四極山(シハツヤマ)　(三・二七二)

などある。また

杲鳥　カホドリ　(十・一八二三)
在杲石(アリガホシ)(有りが欲し)住みよき里　(六・一〇五九)
早良　佐波良　(和名鈔卷五)
颯至　不佐志　(鈔名卷五)

の如く、字音の韻のウをハ行に轉用した例もある。それはまたワ行にも轉用せられて、書紀(仁德・即位前)に「考羅」とある地が、古事記(中卷)に「訶和羅(カワラ)」とある。これ等を見合せて考へると、或は當時のハ行音は〔f〕であつたのではなからうかと思はれる。ハ行音のすべてがさうであつたとは言はれないまでも、ある場合には〔f〕になつてゐたといふことは出來るかと思ふ。

平安朝時代には動詞・形容詞の語尾に音便といふ現象が盛にあらはれて來るが、この時代にはまだそれは認められない。けれども單語の中においては音のかはつたものがある。

見渡三室山石穗菅(ミワタセバミムロノヤマノイハホスゲ)　……　一云三諸山之石小菅(ミモロノヤマノイハコスゲ)　(十一・二四七二)

これによると「ミムロ」とも「ミモロ」とも言つたやうである。「ミムロ」は普通「御室」の義とせられてゐるが、橘守部は

「比母呂岐（ヒモロギ）を常には上下を略き、御（ミ）ノ言をそへて御諸（ミモロ）といひ（師の冠辭考）といつてゐる。用例を見るに記紀の歌にもミモロとあり、萬葉集にもミモロの方が多く、殊に普通名詞として用ひられた場合には「室」の字が用ひられてゐない。とにかく古くはミモロと言つたらしいところを見ると、守部の語源説をそのまゝ信じられないにしても、室の意から出たともいへないであらうと澤瀉先生は言つてをられる。（「國語・國文」第一卷第二號）

多加麻刀（タカマト）の野の上の宮は荒れにけり　（二十・四五〇六）

高圓之野邊（タカマトノ）の秋はぎ　（二・二三一）

夕月夜きよく照るらむ高松之野爾（タカマツノヌニ）　（十・一八七四）

まねく行かば人知りぬべみ狹根葛（サネカヅラ）後もあはむと　（二・二〇七）

ゆふだたみ田上山の狹名葛（サナカヅラ）ありさりてしも今ならずとも　（十二・三〇七〇）

奈具佐牟留（ナグサムル）心は無しに雲隱り鳴きゆく鳥のねのみし泣かゆ　（五・八九八）

名草漏心（ナグサモル）はなしにかくのみに戀ひや渡らむ月に日にけに　（十一・二五九六）

布勢の海の浦を行きつつ玉も比利波牟（ヒリハム）　（十八・四〇三八）

信濃なる千曲の川のさざれ石も君しふみてば玉と比呂波牟（ヒロハム）　（十四・三四〇〇）

遠き山關も越え來ぬ今さらにあふべきよしの無きが佐夫之佐（サブシサ）…一云左必之佐（サビシサ）　（十五・三七三四）

いづれも母音の變化である。「ヒロフ」「サビシ」は各この一例だけで、他は皆「ヒリフ」「サブシ」とある。又「申す」といふ語は次の如く二樣に言はれる。「マウス」の方が新しいのである。

山城の筒城の宮に物麻袁須吾がせの君は涙ぐましも（記・下）

あまとぶや鳥にもがもや都まで意久利摩遠志弖飛びかへるもの（五・八七六）

家人のいはへにかあらむ平らけく舟出はしぬと親に麻宇佐禰（二十・四四〇九）

堀江より水脈びきしつつ御舟さす賤男のともは川の瀬麻宇勢（十八・四〇六一）

これらは一語の中における或音のかはつた例である。

和我伊母古がしぬびにせよとつけし紐絲になるとも吾は解かじとよ（二十・四四〇五）

沖つ風いたく吹きせば和伎毛故がなげきの霧に飽かましものを（十五・三六一六）

これは數語の熟する場合で、「我が妹子」のガとイとが約まつてギとなつたのである。ワギモコといふのが普通で、ワガイモコといつたのは、この一例だけである。しかも、これは東國から出て來た防人の歌であるから、特別なものである。

梅の花今咲けるごと散りすぎず和我覇のそのにありこせぬかも（五・八一六）

春の野に鳴くや鶯なつけむと和何弊のそのに梅が花咲く（五・八三七）

鶯のおと聞くなべに梅の花和企弊のそのに咲きて散る見ゆ（五・八四一）

春されば和伎覇の里の川とにはあゆこさ走る君待ちがてに（五・八五九）

「我が家」といふところであるが、前の二例はそのイの省かれた例、後の二例はガとイと約まつてギとなつた例である。ワガイへと歌つた例はないやうであるが、防人の歌にはそれに準ずべきものがある。

和我伊波呂に行かも人もが草枕旅はくるしと告げやらまくも　（二十・四四〇六）

また「といふ」の場合も同様に、イの省かれる場合と、トとイと約まつてチとなる場合とある。但し平安朝のものに見えるテフといふ形はまだ見えない。

ます〱も重き馬荷に表荷打つ等伊布ことのごと　（五・八九七）

音にきき目には未だ見ずさよひめがひれ振りき等敷君松浦山　（五・八八三）

うけぐつを脱ぎ棄る如くふみぬぎて行く智布人は石木よりなりでし人か　（五・八〇〇）

音が省かれる例には次のやうなのもある。

伊母我陛邇（妹が家に）雪かもふると見るまでにここだもまがふ梅の花かも　（五・八四四）

若年魚つる松浦の川の川波のなみにし母波婆（思はば）われ戀ひめやも　（五・八五八）

梅の花夢に語らくみやびたる花と阿例母布（我思ふ）酒に浮べこそ　（五・八五二）

これらは省かれた音の上に、それを含む音のない場合の例である。

和可由（若年魚）　（五・八五八）

韓國を以柯儞輔（如何に言ふ）ことぞ目頰子來る　（紀、繼體天皇廿四年）

ますらをや何か母能毛布（物思ふ）　（十七・三九七三）

小林に我を比岐例底（引入れて）せし人の面も知らず家も知らずもや　（紀、皇極天皇三年）

これらは、省かれた音が上に含まれてゐる例である。

玉に貫く花橘を乏しみしこの我が里に來鳴かず安流良之（アルラシ）（十七・三九八四）

武庫の海のには余久安良之（ヨクアラシ）いさりするあまの釣舟波の上ゆ見ゆ（十五・三六〇九）

これはルラと同じ類のものが重なるので、一つ省かれたものである。「けるらし」などは、いつも「けらし」として用ひられる。

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐宿家良思母（イネニケラシモ）（八・一五一一）

また動詞「あり」が熟する場合は次の如く約まる。

伊敝爾安流（イヘニアル）妹しおもひがなしも（十五・三六八六）

伊敝奈流（イヘナル）妹にあひて來ましを（十五・三六七一）

妹とありし時はあれども別れては衣手寒き母能爾曽安里家流（モノニゾアリケル）（十五・三五九一）

梅の花いつは折らじといとはねど咲きのさかりは惜しき物奈利（モノナリ）（十七・三九〇四）

照る月の流るゝ見れば天の河いづるみなとは海にざりける（土佐日記）

この土佐日記の例のやうに、係詞の「ぞ」と約まつた例は萬葉集時代には見られない。

老爾弖阿留（オイニテアル）我が身の上に病をと加弖阿禮婆（クハヘテアレバ）（五・八九七）

櫻花つぎて咲くべく奈利爾弖阿良受也（ナリニテアラズヤ）（五・八二九）

梅の花佐枝多流（サキタル）そのの青柳をかづらにしつゝ遊びくらさな（五・八二五）

常人の戀ふといふよりはあまりにて我は死ぬべく奈里爾多良受也（ナリニタラズヤ）（十八・四〇八〇）

とりが鳴く東男(あづまをとこ)の妻別れ可奈之久安里家牟(カナシクアリケム)年の緒長み　（二十・四三三三）

世の中は空しきものと知る時しいよよますます加奈之可利家理(カナシカリケリ)　（五・七九三）

玉島のこの川かみに家はあれど君をやさしみ阿良波佐受阿利吉(アラハサズアリキ)　（五・八五四）

あらたまの年の緒長く安波射禮杼(アハザレド)けしき心をわが思(も)はなくに　（十五・三七七五）

かくばかり戀ひむとかねて知らませば妹をば見ずぞ安流倍久安里家留(アルベクアリケル)　（十五・三七三九）

雷(いかづち)の光の如きこれの身は死(しに)の大王(おほきみ)常にたぐへり於豆閇可良受夜(オヅベカラズヤ)　（佛足石歌）

留め得ぬ壽(イノチ)爾之在者(ニシアレバ)しきたへの家ゆは出でて雲がくりにき　（三・四六一）

大君の美許等爾作例波(ミコトニサレバ)父母をいはひべとおきてまゐで來にしを　（二十・四三九三）

この最後の例は防人の歌で、かうした約まり方をしたのはこれだけである。「春されば」「夕されば」などいふ語も「しあり」のシとアと約まつてサとなつたものであると從來いはれてゐて、卷十には「春之在者」と書いて「春されば」と訓ませた例が三つ（一八九七・一九七九・一八二六）あるのであるが、これは一種の洒落書であつて、これによつて語源を求めるのはよろしくない、これは「さる」といふ一つの動詞で、動き移るを原義とし、その動き移るさまの如何によつて或は漢字の「去」にあたる場合もあり、或は「來」にあたる場合もあるもの、「春されば」「夕されば」等はその後の場合であると見る説によるべきである。

「萬葉學論纂」所收「夕されば」考――德田淨氏――及び山田孝雄博士「萬葉集講義」卷一、九五頁參照。

また音が省かれたり約まつたりするのではないが、下の音にひかれて變る場合もある。

やすみしし和我於朋枳瀰波（ワガオホキミハ）うべなうべな我を問はすな（紀、仁德天皇五十年）
高光る日の御子やすみしし和賀意富岐美（ワガオホキミ）あらたまの年が來ふればあらたまの月は來へゆく（記、中）
やすみしし和期大王（ワゴオホキミ）高てらす日の御子あらたへの藤井が原に大御門始め給ひて（一・五二）
いにしへを思ほすらしも和期於保伎美（ワゴオホキミ）吉野の宮をあり通ひめす（十八・四〇九九）

四　外 來 語

外國との交通は頗る古くから行はれてゐる。從つて言語の輸入もある筈で、「馬（ウマ）」「梅（ウメ）」等は外來語で、字音から來たものであると古來言はれてゐる。けれどもその輸入はよほど古い時代に行はれたものであらう。今はその時代を考へるよしもない。萬葉集時代に旣に外來語であるといふ意識もなかつたかと思はれるのである。それ故これらの語については今はおく。その後漢學が傳はり佛敎が傳はり、制度文物一に外國のものをとり入れるのに急であつた時代のことを思ふに、外國語の國語にとり入れられた數も少くないことと思ふ。けれども歌には餘り多く見ることが出來ないが、次のやうなものがある。

雙六（スグロク）（十六・三八二七、三八三八）
香（カウ）（十六・三八二八）
功（グウ）（十六・三八五八）
五位（ゴヰ）（十六・三八五八）
過所（クワソ）（十五・三七五四）
力士儛（リキシマヒ）（十六・三八三一）
無何有乃鄕（ムカウノサト）（十六・三八五一）
藐孤射能山（ハコヤノヤマ）（十六・三八五一）

法師（ホフシ）（十六・三八四六）

布施（フセ）（五・九〇六）

餓鬼（ガキ）（四・六〇八）

女餓鬼（メガキ）・男餓鬼（ヲガキ）（十六・三八四〇）

檀越（タヌヲチ）（十六・三八四七）

塔（タフ）（十六・三八二八）

婆羅門（バラモヌ）（十六・三八五六）

これらの大部分が巻十六で、たはむれの歌に用ひられてゐるのは注意すべきである。既に述べた如く歌語といふものが意識せられてゐて、これらが自由にとり入れられないやうになつてゐたといふことが考へられる。宣命には次のやうな例がある。

禮等拜等（九詔）

博士（十一詔）

力田（十三詔）

孝義（十三詔）

内相（十九詔）

不可思議威神之力（十九詔）

職事（廿四詔）

乾政官（廿六詔）

弟子（廿七詔・卅八詔）

大寺（廿七詔）

賞罰（廿七詔・廿八詔）

禪師（廿八詔・四十一詔）

師（廿八詔）

經（廿八詔・卅八詔）

國王（廿八詔）

王位（廿八詔）

淨戒（廿八詔）

謀反乃心（卅四詔）

散位（卅五詔）
緣（四十一詔）
孝子順孫義夫孝婦節婦力田（四十二詔）
鰥寡孤獨（四十二詔）
盧舍那（十二詔・十三詔・十五詔）
盧舍那如來（十九詔）
觀世音菩薩（十九詔）
護法梵王帝釋四大天王（十九詔）
最勝王經（十三詔・四十二詔）
菩薩（卅八詔・卅八詔・四十一詔）
御袈裟（卅八詔）
舍利（四十一詔）
吉祥天（四十二詔）

これで全部ではないが、元來國語で書かうとしてゐる宣命の文であるから、歌よりは澤山用ひられてゐるけれど、これとて多いとは言はれない。さてこれらの語が、「力士儛」「女餓鬼」「男餓鬼」「御袈裟」など用ひられるところは、大分國語的になつてゐると思はれるが、要するにまだ體言として用ひられてゐるだけで、竹取物語に、

かたちのけそうなること
勢猛のもの
かくたいだいしくやはならはすべき
かぐや姫の要じ給ふべきなりけり
まづ請じ奉らむ
奏す

弓矢を帶して
念じて射むとす

とあるやうな用ひ方はないことは、奈良朝文法史に指摘してある如くである。唯サ行變格の動詞をつけた例は、

布施之奉良久波（法隆寺伽藍緣起）
最勝王經乎令講讀末都利（四十二詔）

の如きは或はそれかと見ゆれども、これとてもよみ方の上に確證なければ、と言つてをられるが、恐らく音讀したものではあるまいか。それにしても「要ず」「請ず」「奏す」「帶す」「念ず」等とは、なほ趣が違つてゐるといふべきである。

五　東國方言

萬葉集卷十四は全部東歌で、國の分明してゐるものでは遠江・駿河・伊豆・相模・武藏・上總・下總・常陸・信濃・上野・下野・陸奥の十二ヶ國の歌が集められてゐる。また卷二十の一部に防人歌があつて、遠江・駿河・相模・武藏・上總・下總・常陸・信濃・上野・下野等の國々から出た防人とその關係の人との歌が集められてゐる。卷二十の方は十四のに比すると時代も新しく、且つ作者の身分境遇も限られてゐるので、兩者の間には種々な點に於て相違も見られるのであるが、とにかくいづれも東國地方の人の歌、或は東國地方に愛誦せられた歌として、その用語の上にも當時の中央語卽ち大和言葉に對して相當異つたものがあり、東國方言といふものを考へることが出來る。

けれどもそれはごく大體のことであつて、くはしいことは言はれない。のみならず、東國方言らしいと思はれても、案外さうで無ささうなのがあつたりして、方言だと見極めることの困難な場合がある。例へば「時」の意をあらはす「しだ」といふ語を用ひた歌は、萬葉集では卷十四に五首（三四六一・三四七八・三五一五・三五二〇・三五三三）卷二十に一首（四三六七）だけで、何れも東國關係のものであるから東國方言かと思ふと、肥前風土記にも、

　篠原の弟姫の子をさ一夜（ひとゆ）も率寢（ゐね）てむ志太（シダ）や家にくださむ

とあつて、東國方言と斷定することが躊躇せられ、「をてもこのも」といふ語も卷十四に二箇所（三三六一・三三九三）あつて、東國語らしいと思つてみると、大伴家持の歌にも二箇所（四〇一一・四〇一三）用ひられてゐるといふ次第である。また「泣く」を下二段に活用させたと考へられるものがあつて、

　相模嶺のを峯見そぐし忘れ來る妹が名よびて吾乎禰之奈久奈（アヲネシナクナ）（十四・三三六二）

　武藏嶺のを峯見かくし忘れ行く君が名かけて安乎禰思奈久流（アヲネシナクル）（右ノ或本歌）

　なせの子や等里（トリ）の岡道し中たをれ安乎禰思奈久與（アヲネシナクヨ）いくづくまでに（十四・三四五八）

　暫くは寢つゝもあらむを夢のみにもとな見えつつ安乎禰思奈久流（アヲネシナクル）（十四・三四七一）

　ほととぎすなほも鳴かなむもとつ人かけつつもとな安乎禰之奈久母（アヲネシナクモ）（二十・四四三七）

の如く用ひられる。いかにも東國語のやうに見えるが、最後の例は元正天皇の御製といふことになつてゐる。また「何と」といふ意味のことを「あど」といつて、

　わが背子を安杼（アド）かも言はむ武藏野の朮が花の時なきものを（十四・三三七九）

高麗錦紐とき放（さ）けて寝るが上に安杼（アド）せろとかもあやにかなしき（十四・三四六五）

の如く用ひたのがなほ巻十四に五首（三四〇四・三四九四・三五七二・三五六四・三三九七）あるのであるが、巻十五（三六三九）に、

浪の上に浮寝せしよひ安杼（アド）思へか心かなしく夢に見えつる

とあるので、遽に東國語とは斷定し難いといふことになるのである。

かくて一寸見たところ東國方言らしく感じてもそうだと言ひきれぬものがあり、方言の認定に甚だ困難を感ずる次第であるが、ここにはごく大まかに考へて、東國方言と思はれるものの大體の姿をながめて見ようと思ふ。

まづ語彙的な方面では、意義の決定しかねるものはしばらくおき、意義の解し得るもので中央語と音の違つてゐるものを見ると、まづ母音に於ては

1　ア列の音がイウエオの列に

阿之我利（アシガリ）——足柄（三三六八）
安奈由牟（アナユム）——足惱む（三五三三）
故夜提（コヤデ）——小枝（三四九三）
多知許毛（タチゴモ）——起鴨（四三五四）

2　イ列の音がウエオの列に

波流（ハル）——針（四四二〇）

西美度（セミド）――清水（三五四六）
於思敝（オシベ）――磯邊（三三五九）

3　ウ列の音がアイエオの列に

可與波等里（カヨハトリ）――通ふ鳥（三五二六）
爾努具母（ニヌグモ）――布雲（三五一三）
古布志氣毛波母（コフシケモハモ）――戀ふしく思はむ（四四一九）
美等登志怒波禰（ミトトシヌバネ）――見つつ偲ばね（四四二一）

4　エ列の音がアイウオの列に

故夜提（コヤデ）――小枝（三四九三）
由美（ユミ）――夢（四三九四）
物能毛比豆都毛（モノモヒヅツモ）――物思ひ出（で）つも（三四四三）
加其（カゴ）――影（四三二二）

5　オ列の音がアイウエの列に

阿母（アモ）――母（おも）（四三八三）
於思敝（ミシベ）――磯邊（三三五九）
加由波牟（カユハム）――通はむ（四三二四）

多多美氣米(タタミケメ)——たたみ薦(こも)（四三三八）

これらの音の變化は一音だけでなく、「セミド」「コヤデ」「オシベ」の如く相關聯してあらはれることが多い。なほ注意せられることは、「月夜」は中央語でもツクヨで、

燈火を都久欲(ツクヨ)になぞへ（十八・四〇五四）

淸き都久欲(ツクヨ)に見れど飽かぬかも（二十・四四五三）

など用ひるが、「月」だけを「ツク」といふことは無い。ところが東國語では、

多刀都久(タトツク)——立つ月（三四七六）

都久可多與留(ツクカタヨル)——月片寄る（三五六五）

都久乃之良奈久(ツクノシラナク)——月の知らなく（四四一三）

などの如く「ツク」といふのである。或はこれが古語なのではあるまいか。

また形容詞の連體形を「——ケ」といふことが多い。

可奈師家兒良(カナシケコラ)——愛しき兒ら（三四一二）

加奈思家乎於吉氐(カナシケヲオキテ)——愛しきをおきて（三五五一）

安是可加奈思家(アゼカカナシケ)——などか愛しき（三五七六）

奈夜麻思家比登都麻(ナヤマシケヒトヅマ)——惱ましき人妻（三五五七）

阿志氣比等(アシケヒト)——惡しき人（四三八二）

伊麻叙久夜之氣（イマゾクヤシケ）——今ぞ悔しき（四三七六）
須美與氣乎（スミヨケヲ）——住みよきを（四四一九）

勿論次のやうな例もある。

於毛思路伎野（オモシロキヌ）（三四五二）
等毛思吉伎美（トモシキキミ）（三五二三）
加奈之伎世呂（カナシキセロ）（三五四九）

動詞の連體形はオ列に變ることが多い。

比古布禰（ヒコフネ）——引く舟（三四三一）
由古作枳（ユコサキ）——行く先（四三八五）
弊古祖志良奈美（ヘコソシラナミ）——觸越す白浪（四三八九）
多川都久（タトツク）——立つ月（三四七六）
波保麻米（ハホマメ）——這ふ豆（四三五二）
阿抱思太（アホシダ）——逢ふ時（した）（三四七八）
於吉爾須毛乎加毛（オキニスモヲカモ）——沖に住む小鴨（三五二七）
安路許曾要志母（アロコソエシモ）——有るこそ善しも（三五〇九）
安乎楊木能波良路可波刀（アヲヤギノハラロカハト）——青柳の張れる川門（三五四六）

この最後の例の如く、所謂完了の助動詞「リ」のつくところは、ア列音となることが多い。

思保夫禰能於可禮婆可奈之（シホブネノオカレバカナシ）——鹽舟の置ければかなし（三五五六）
由伎可母布良留（ユキカモフラル）——雪かも降れる（三三五一）
爾努保佐流可母（ニヌホサルカモ）——布乾せるかも（三三五一）
多々理之母己呂（タタリシモコロ）——立てりし如（もころ）（四三七五）
由布氣爾毛許余比登乃良路和賀西奈波（ユフケニモコヨヒトノラロワガセナハ）——夕占にも今夜と告れる我がせなは（三四六九）

これらも勿論中央語と同じ形の例もある。

布須思之（フスシシ）——臥す猪（三四二八）
安敝流世奈（アヘルセナ）——逢へるせな（三四六三）
余知乎曾母氐流（ヨチヲゾモテル）——よちをぞ持てる（三四四〇）

また助動詞「む」は「モ」といふことが多い。

伊麻波伊可爾世母（イマハイカニセモ）——今は如何に爲む（三四一八）
宿毛等和波毛布（ネモトワハモフ）——寢むと吾は思ふ（三四九四）
美毛比等母我母（ミモヒトモガモ）——見む人もがも（四三二九）
多志埿毛等伎爾（タシデモトキニ）——立出む時に（四三八三）

これもいふまでもなく「む」ともいふのである。

奈我目保里勢牟 —— 汝がめ欲りせむ （三三八三）

多賀家可母多牟 —— 誰が笥か持たむ （三四二四）

以上、形容詞・動詞・助動詞の音の變化はまづ東國方言に於ける通則的なものと考へられる。次に子音の變化する例は大體次の如きものがある。

1　ラ行音がナ行音に變化したもの

うべ兒奈は和奴に故布奈毛立と月の奴賀奈へ行けば戀ふしかる奈母 （三四七六）

略解に「此歌の奈は皆良に通へり」とある。「兒な」は「兒ら」、「わぬ」は「我」、「なも」は二つとも「らむ」、「ぬがなへ」は「流らへ」である「兒ら」は「兒ろ」といふのが普通で、

古侶賀波太 （四四三一）

比登豆麻古呂 （三五四一）

加奈思吉兒呂 （三三五一）

筑波禰乃禰呂 （三三八八）

比呂 —— 日ろ （四三二九）

など澤山ある。また

などもある。この「ろ」は記紀の歌などには、

しが葉のひろりいますは大君ろかも （記、仁徳天皇）

百足らずやそはの木は大君ろかも（紀、仁徳天皇三十年）
女鳥のわが大君の織ろす服(はた)誰が料(たね)ろかも（紀、仁徳天皇）
さよ床を並べむ君はかしこきろかも（紀、仁徳天皇廿二年）

の如く用ひられ、萬葉集の東歌以外にも、

少女がともは乏吉呂賀聞(トモシキロカモ)（一・五三）
荒雄らは妻子の産業(なり)をば不念呂(オモハズロ)（十六・三八六五）

などあるが、とにかく古い言葉で、中央語には餘り用ひられなくなつてゐたらしい。これを「な」といふ確かな例は東歌防人歌にも多くはない。防人歌には、

和努等里都伎弖伊比之古奈波毛(ワヌトリツキテイヒシコナハモ)——我とりつきて言ひし兒らはも（四三五八）

といふのがある。

「らむ」を「なむ」「なも」などいふ例は幾つもある。

思保美都奈武賀(シホミツナムカ)——潮滿つらむか（三三六六）
於毛布奈牟己許呂(オモフナムココロ)——思ふらむ心（三四九六）
於毛抱須奈母呂(オモホスナモロ)——思ほすらむろ（三五五二）
和乎可麻都那毛(ワヲカマツナモ)——吾をか待つらむ（三五六三）

2　**タ**行音から**サ**行音に變化したもの

禰呂爾都久多思(ネロニツクタシ)——嶺ろに月立ち　（三三九五）
多志埿毛等伎(タシデモトキ)——立出(たちで)む時　（四三八三）
許禮乃波流母志(コレノハルモシ)——此の針もち　（四四二〇）
伊豆思牟伎氏可(イヅシムキテカ)——何方向きてか　（三四七四）
阿米都之(アメツシ)——天地　（四三九二）
阿母志志(アモシシ)——母父　（四三七六）

この逆を行つたものに、「うちひさす」といふ枕詞を、「宇知比佐都(ウチヒサツ)」（三五〇五）といつたのがある。そしてそれは巻十三にも「打久津(ウチヒサツ)」（三二九五）と用ひられてゐる。なほ右の外にも、「群立(むらだ)ち」を言つたといふ「宇良太知(ウラダチ)」（三五五二）、群苗と占とかけたといふ「武良奈倍(ムラナヘ)」（三四一八）の如き例もあるが、子音の變化として主なものは右の二つである。

次に語法的な方面では、最も注意をひくのは打消の助動詞である。

よにもたよらに兒ろが伊波奈久爾(イハナクニ)　（三三六八）
あふこと難し今日にし安良受波(アラズバ)　（三四〇一）
眞間の繼橋夜麻受(ヤマズ)通はむ　（三三八七）
をけにふすさに宇麻受登毛(ウマズトモ)　（三四八四）
乃良奴(ノラヌ)君が名卜に出にけり　（三三七四）
安波禰杼毛(アハネドモ)異しき心を吾が思はなくに　（三四八二）

右の如く中央語と同じものも用ひられるが、次の如き特有なものがあるのである。

忘らえこばこそ汝を可家奈波賣（三三九四）

安波奈波婆しぬびにせむと（三四二六）

然らばか隣の衣を借りて伎奈波毛（三四七二）

「なは」はこれらで未然形と考へられる。

立別れ去にし夜よりせろに安波奈布與（三三七五）

忘れ西奈布母（三四一九）

言おろはへて未だ宿奈布母（三五二五）

玉の姿は忘れ西奈布母（四三七八）

我摘めど籠にも美多奈布せなと摘まさね（三四四四）

對馬の嶺は下雲安良南敷上の嶺にたなびく雲を見つゝしぬばも（三五一六）

「なふ」は終止形と考へられる。

晝とけば等家奈敝比毛（三四八三）

をさ〳〵も禰奈敝古故に母にころばえ（三五二九）

音高しもな宿莫敝兒ゆゑに（三五五五）

佐禰奈敝波心の緒ろにのりてかなしも（三四六六）

安波奈倣波（アハナヘバ）おきつま鴨のなげきぞ吾がする（三五二四）

宿奈倣杼母（ネナヘドモ）兒ろが襲着（おそき）の有ろこそ良（え）しも（三五〇九）

「なへ」は連體形と已然形とをかねてゐると考へられる。連用形の用例は見えないが、連用形的なものに「なな」といふ形がある。

斯くすすぞ宿奈莫那里爾思（ネナナナリニシ）奥をかぬかぬ（三四八七）

新田山（にひた）ねには都可奈那（ツカナナ）吾によそりはしなる兒らしあやに愛しも（三四〇八）

うらがれ勢那奈（セナナ）とこはにもがも（三四三六）

忘れは勢奈那（セナナ）いや思ひますに（三五五七）

我が門の片山椿まことなれ我が手布禮奈奈（フレナナ）地（つち）におちもかも（四四一八）

わがせなを筑紫へやりてうつくしみ帶は等可奈奈（トカナナ）あやにかも寢も（四四二二）

ま日くれて宵（よひ）なは許奈爾（コナニ）明けぬ時（しだ）來る（三四六一）

最後のは「なに」であるが、「なな」と關聯させて考へたい。この下の「な」について、奈良朝文法史には、「ねなななりにし」の方は、

「な」の下の「な」は間投助詞なり。

といひ、その他のものは、

下の「な」は終助詞にして冀望をあらはすものにして用言の未然形に附屬するものなり。

といつてをられるが疑問である。私にはまだ考へ得ない。
次には、

　水沫奈須（ナス）もろき命　（五・九〇二）

　綜麻形（ヘソガタ）の林のさきのさ野榛の衣に著成（ツクナス）目につくわが背　（一・一九）

など用ひられる「なす」といふ語である。東歌にも「なす」といふ例もあるが、また「のす」ともいはれる。然し今はその發音の問題ではなく、用法の問題である。東歌以外に於ては體言をうける場合が多く、「衣につくなす」といふやうに用言をうける例は甚だ少く、總索引によると、

　國遠みおもひなわびそ風のむた雲之行如（クモノユクナス）言は通はむ　（十二・三一七八）

といふのがあるだけであるが、これとて「雲の行くごと」と訓むことも出來ぬ譯ではない（舊訓や略解はさう訓んでゐる）ので、確な例とはいへない。かくて中央語に於ては用法が非常に固定してしまつてゐるといふべきであるが、東歌に於てはその點が甚だ自由である。（例は「なす」「のす」一緒にあげる）

　鳴る瀬ろに木屑（こづ）の余須奈須（ヨスナス）いとのきて愛（かな）しけせろに人さへよすも　（三五四八）

　利根川の川瀬も知らず直渡り浪に安布能須（アフノス）あへる君かも　（三四一三）

　高き嶺に雲の都久能須（ツクノス）我さへに君につきなな高嶺と思ひて　（三五一四）

　水久君野（ミクグ）に鴨の波抱能須（ハホノス）兒ろが上に言おろはへて未だねなふも　（三五二五）

　あずへから駒の由胡能須（ユコノス）あやはども人妻兒ろをいきに我がする　（三五四一）

かなと田をあらがきまゆみ日が照れば雨を萬刀能須君をと待とも（三五六一）

白玉を手にとり持して美流乃須母家なる妹をまた見てもや（四四一五）

またこの「なす」のついた語が裝定する語について見ると、奈良朝文法史に說いてあるやうに三種になる。

〔1〕體言

垣穗成人辭聞而（四・七一三）

麻多麻奈須布多都能伊斯乎（五・八一三）

爾能保奈酒意母提乃宇倍爾（五・八〇四）

〔2〕形容詞

雲居奈須遠毛吾は今日見つるかも（三・二四八）

朝日奈須目細毛暮日奈須浦細毛（十三・三二三四）

下野美可母の山の許奈良能須麻具波思兒呂波誰が笥か持たむ（十四・三四二四）

〔3〕動詞

雲居奈須心射左欲比（三・三七二）

麻多麻那須阿賀母布伊毛加賀美那須阿賀母布都麻（記、下）

前にあげた東歌の例は、「三五四一」を除いて他は皆これに屬する。

ところで東歌にはまた次のやうな例もある。

麻可奈思美奴良久波思家良久佐奈良久波伊豆能多可禰能奈流左波奈須與
阿敝良久波多麻能乎思家也古布良久波布自乃多可禰爾布流由伎奈須毛

これは

佐奴良久波多麻乃緒婆可里古布良久波布自能多可禰乃奈流佐波能其登（三三五八）

といふ歌の次にあり。前者は、「或本歌曰」とあり、後者は「一本歌曰」とあるものである。いづれも意味がとりにくいが、前者はことに解し難い。けれども四五句は「佐奈良久波」といふ主語を「伊豆の高嶺の鳴澤なすよ」と說述してゐるものであることは明かである。また後者は、「しけや」は反語で、逢へることは玉の緒の短かさにもしかず、戀ふることは富士の高嶺に降る雪の如く盛であるといふ意でもあらうか。これも「戀ふらくは」といふ主語に對して、「富士の高嶺に降る雪なすも」と說述してゐることは明かである。「なす」といふ語をかく用ひることは他にその例を見ない。

また、

妹をこそ相見に來しか眉曳の横山邊ろの思之奈須於母敝流（三五三一）

といふいひ方も他の例と少し行き方がかはつてゐるし、

麻都が浦に騷ゑうらだちま人言思ほすなもろ和賀母抱乃須毛（三五五二）

は「我が思ふのすも思ほすなもろ」の順をかへたものであるが、これも東歌にこの一例を見るだけである。要するに前にも述べたやうに、中央に於ては既に用法が非常に局してしまつてゐる此の語が、東國に於てはまだかなり自由に使はれてゐることを知る。その語形に於ても、「のす」といふ語は、

布由紀能須（フユキノス）からが下樹のさやさや　（記、中）

とも用ひられて或はこの方が古く、東國にはその古形が保存せられてゐたといふことも出來るのではあるまいか。

「――まくも」と結んだ歌は卷十四と二十とに各二首づつあるだけのやうである。

安治可麻の可家のみなとに入る潮の許氐多受久毛可伊里氐禰麻久毛（コテタズクモガイリテネマクモ）　（三五五三）

妹が寢る床のあたりに岩ぐくる水にもがもよ入りて禰末久母（ネマクモ）　（三五五四）

母（あも）とじも玉にもがもや戴きてみづらの中に阿敝麻可麻久母（アヘマカマクモ）　（四三七七）

我が家（いは）ろに行かも人もが草枕旅はくるしと都氣夜良麻久母（ツゲヤラマクモ）　（四四〇六）

「三五五三」の四句は解し難い。他の三首の歌は何れも「もが」といふ冀望の助詞が上にあるので、今も「毛可」を「もが」と訓んで、上三句の序は第五句にかゝると見てはどうかと思ふが、「許氐多受久」が解し得ないので何ともいはれぬ。「可」を濁音によむのも疑問がある。とにかく「すべの知らなく」（十七・三九三七）、「君が越えまく」（十九・四二二五）といふやうな結び方は見られるが、これに「も」をつけた確かな例は、右の外には、齊明天皇の御製と考へられる、

　晝は日のくるるまで夜は夜の明くるきはみ思ひつつ寐（い）もねがてにと阿可思通良久茂（アカシツラクモ）長き此の夜を　（四・四八五）

といふのがあるだけのやうである。

また命令の言ひ方に、

高麗錦紐とき放（さ）けてぬるが上（へ）に安杼世呂（アドセロ）とかもあやに愛（かな）しき　（三四六五）

草枕旅の丸寢の紐絶えば我（あ）が手と都氣呂（ツケロ）これの針（はる）もし　（四四二〇）

の如く「ろ」をつけた例があるのは、「今日の東方言語にもこのまゝのもの存するは豈面白き現象にあらずや」と奈良朝文法史にも言はれてゐる。

また次のやうな例がある。

比等登於多波布（ヒトトオタバフ）（三四〇九）

比絲曾於多波布（ヒトゾオタバフ）（三五一八）

これで見ると、係助詞「ぞ」を「と」といふことがあるやうである。

荒し男のい小箭（さき）手狭み向ひたちかなるましづみ伊濱弖登阿我久流（イデテトアガクル）（四四三〇）

かなと田をあらがきまゆみ日が照（こ）れば雨を待とのす伎美乎等麻刀母（キミヲトマトモ）（三五六一）

奈良朝文法史には「この『と』は琉球語にも存するものにして『ぞ』の古き形なりしものと見ゆ」とある。

六　敬語

わが國語に敬語の發達してゐることは、實に國語の一特質として數ふべく、世界の言語にその比を見ないと言はれてゐる。而してそれは頗る古い時代から發達してゐたもので、漢字をもつて物事を記錄することを覺えた上代人が、國語をうつすためになした工夫は、一方では固有名詞をあらはす爲の假名用法となり、一方では敬語意識を滿足させるための次のやうな用法となつたのである。

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午年召於大王天皇與太子而誓願賜我大御病太平欲坐故將造寺藥師像作仕

奉詔

これは推古天皇十五年に成つた法隆寺藥師佛の光背の銘の一部分で、形は漢文のやうであるが漢文としては讀まれない。

池の邊の大宮に天の下治しめしゝ天皇、大御身勞はり賜へりし時、歲次丙午の年、大王天皇と太子とを召して、誓ひ願ひ賜ひしく、我が大御病太平に坐さむと欲ほすが故に、寺を造り藥師の像作り仕へ奉らむとすと詔りたまひき。

かく國語風に讀むべきものである。「大御身勞賜時」「誓願賜」「大御病太平欲坐故」といふやうな書き方は漢文には無いところで、皆敬語をあらはすが爲にせられた苦心のあらはれである。

さてここで上代の國語に於ける敬語法はどうあるかといふことになるのであるが、それを見るには殊に萬葉集の歌だけでは不十分であるのはいふまでもないが、今は他の文獻にわたる餘裕が無いので、やむを得ず歌にあらはれた所だけを大體見て行かうと思ふ。古今集の歌には敬語の使用が非常に少いが、萬葉集の歌には相當に多く用ひられてゐるので、おほよその所は知られるといつてもよいと思ふ。

〔一〕尊　敬

1　體言に關するもの

それ自身に敬意を含んでゐる語では「君」といふ語が最も普通に用ひられる。これは現在代名詞といはれると同じ心持に見てよいと思はれるのもあるが、大抵は名詞と見るべきでないかと思はれる。これに「大」といふ接頭語がついて

「大君」となると用ひられる範圍は局限せられてくる。「大君」に對しては「すめろぎ」といふ言葉があはせて考へられる。

於保伎美能等保能美可度と思へれどけ長くしあれば戀ひにけるかも（十五・三六六八）

やすみしゝ吾大王高光る吾日乃皇子の馬なめてみ狩立たせる……春草のいやめづらしき吾於富吉美可聞――長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麿作歌（三・二三九）

須賣呂伎能等保能朝廷等韓國に渡るわがせは（十五・三六八八）

須賣呂伎の御代榮えむと東なるみちのく山に金花さく（十八・四〇九七）

多可美久良天の日嗣と天の下しらしめしける須賣呂伎の神のみことのかしこくも始め賜ひて貴くも定め賜へるみ吉野の此の於保美夜に（十八・四〇九八）

荒木田久老の槻乃落葉別記に「おほきみとは當代天皇より皇子諸王までを申稱なり。……須米呂伎とは遠祖の天皇を申奉る稱なるを、皇祖より受繼ませる大御位につきては當代をも申事のあるを、天皇と書きて須賣呂岐ともよむ例のあるによりて、後人ゆくりなく、須米呂伎と申も於保伎美と申もひとつ言と心得て、大皇と書るをも皇と書るをも須米呂伎とよみ誤れるぞおほかりける。」と言つてゐる。なほ「大」といふ接頭語のついた語は「大荒城」（三・四四一）、「大殿」（一・二九、十九・四二二七）等がある。また「殿」は卷十四に「等能乃奈可知」（三四三八）、「等能乃和久胡」（三四五九）と、或は人を指したかと思はれる用法があるが、「大殿」の方はまださういふ用法は見えない。

接頭語で最も普通なのは「み」である。「み吉野」「み山」など單なる美稱のものも、もともとは一つかも知れないが、

今は區別しておく。「み名」「み民」「み舟」「み爲」など例はあげきれない。中には接頭語がついたのであると感じない位に熟してゐるのもある。「宮」「皇子」「御門」「命」等がそれである。「宮」に對して單に「や」といふ語も「葦火焼屋」（十一・二六五一）、「誰ぞ此の屋の戸おそぶる」（十四・三四六〇）などある。けれども「宮」といへば、例へば「船」に對する「み船」の如き關係でなく、特殊なものを思ふのである。また既に「宮道」「京師」「風流」といふやうな語も出來てゐるのである。「御門」も既に門の義以上に發展してゐる。「命」は、

さにづらふ君之三言等玉梓の使も來ねば　（十六・三八一一）

花橘のかくはしき於夜能御言朝よひに聞かぬ日まねく天さかる夷にし居れば　（十九・四一六九）

といふやうな用法は極めて少く、多くは、

大君の美許等かしこみ　（十五・三六四四）

といふやうに用ひられてゐる。また

すめろぎの可未能美許登　（十八・四〇八九）

日雙斯皇子命　（一・四九）

波波蘇婆能波波能美許等……知知能末乃知知能美許等　（二十・四四〇八）

うらめしき伊毛乃美許等　（五・七九四）

はしきよし奈弟乃美許等　（十七・三九五七）

の如く用ひる「みこと」は、「御言」の義でなく、「御事」の義であらうか。

「大(おほ)」と「み」と重ねてつけると一層重い敬語となる。「大宮(おほみや)」「大御門(おほみかど)」「大御船(おほみふね)」「大御身(おほみみ)」「大御手(おほみて)」などである。平安朝に入つてはこれが「おほん」となり、「おん」となるといはれてゐる。代名詞では「いまし」「まし」等がある。

　垂乳根の母に障らばいたづらに伊麻思毛吾毛(イマシモワレモ)事成るべしや　(十一・二五一七)

　此の川に朝菜洗ふ兒奈禮毛安禮毛(ナレモアレモ)よちをぞもてるいで兒たばりに一云麻之毛安禮母(マシモアレモ)　(十四・三四四〇)

大言海に「いまし」をといて、「座(イマ)しノ義、敬語ニテ、みましト同義ナリ」とある。「みまし」の例は續紀第五詔に見られる。「なれ」といふも

　愛我那邇妹命(ウツクシキアガナニモノミコト)　(記、上)

　羽田之汝妹(ハダノナニモ)汝妹此云二儺邇毛一　(紀、履中天皇五年)

　那賀美古夜(ナガミコヤ)つひにしらむと雁は子産(こむ)らし　(記、下)

などの「な」から出てゐるものと思はれ、元來は丁寧な言葉であらうが、今の吾々の感じでは、「な」「なれ」より「いまし」等の方が敬意が多いやうに感じる。

2　用言に關するもの

用言といつても動詞であるが、まづそれ自身に敬意をもつてゐる動詞には「ます」「います」「たぶ」「たまふ」がある。

　王(おほきみ)は千歳に麻佐武(マサム)　(三・二四三)

　わがせこが國へ麻之奈婆(マシナバ)霍公鳥鳴かむ五月はさぶしけむかも　(十七・三九九六)

天爾座月讀壯子（アメニマスツクヨミヲトコ）（六・九八五）

王（おほきみ）は神西座者（カミニシマセバ）（三・二〇五）

はしきよし今日の主人（あるじ）はいそ松の常に伊麻佐禰（イマサネ）今も見るごと（二十・四四九八）

かくばかり零りしく雪に君伊麻左米也母（イマサメヤモ）（十九・四二三三）

萬代に伊麻志多麻比提（イマシタマヒテ）天の下奏（まを）したまはねみかど去らずて（五・八七九）

たくぶすま新羅へ伊須麻（イマス）君が目をけふか明日かといはひて待たむ（十五・三五八七）

風まもりよくして伊麻世（イマセ）荒しその路（三・三八一）

いづれもサ行四段活用である。本來は「有り」「居り」の敬語であるが、右の例でも見るやうに「行く」の意にも用ひられる。

この「ます」が動詞の下に用ひられると、單に敬意だけをあらはす助動詞となる。

ひとの植うる田は宇惠麻佐受（ウヱマサズ）今さらに國わかれして我（あれ）は如何にせむ（十五・三七四六）

しらぬひ筑紫の國に泣く兒なす斯多比枳摩斯提（シタヒキマシテ）（五・七九四）

わが戀ひし君來益奈利（きみキマスナリ）（八・一五一八）

徒に地に散らさばすべを無みよぢて手折りつ見末世吾妹兒（ミマセワギモコ）（八・一五〇七）

梅の花咲ける月夜に伊而麻左自常屋（イデマサジトヤ）（八・一四五二）

百代伊豆麻勢（もゝよイデマセ）わが來（きた）るまで（二十・四三二六）

「行幸(いでまし)」といふ語はこれから出來る。「います」の方は動詞の下に用ひても原義を失はぬことが多いやうである。

　松柏の佐賀延伊麻佐禰(サカエイマサネ)尊きあが君　（十九・四一六九）

　あれをばも如何にせよとか鳰鳥の二人ならびゐ語らひし心そむきて伊幣社可利伊摩須(イヘサカリイマス)　（五・七九四）

　八百萬千萬神の神集ひ集座而(ツドヒイマシテ)神はかりはかりし時に　（二・一六七）

「たぶ」「たまふ」も共に四段活用である。尊敬すべき方が何か下さる心持をあらはすのであるが、次第に形式的になつて、遂には單に敬意をあらはす助動詞として用ひられる。今その變化の順序に例をあげる。（「たぶ」に例が少い）

a　此の見ゆる天の白雲……とのぐもりあひて雨も多麻波禰(タマハネ)　（十八・四一二二）

　草枕旅の翁と思ほして針ぞ多麻敝流(タマヘル)縫はむ物もが　（十八・四一二八）

　鈴が音のはゆまうまやのつゝみ井の水を多麻倍奈(タマヘナ)妹がたゞ手よ　（十四・三四三九）

b　日月はあかしといへど我(あ)が爲は照哉多麻波奴(テリヤタマハヌ)　（五・八九二）

　春さらば奈良の都に咩佐宜多麻波禰(メサゲタマハネ)　（五・八八二）

　わがせこが歸り來まさむ時のため命のこさむ和須禮多麻布奈(ワスレタマフナ)　（十五・三七七四）

c　韓國をむけたひらげて御心を斯豆迷多麻布等(シヅメタマフト)い取らして伊波比多麻比斯(イハヒタマヒシ)ま玉なす二つの石を……（五・八一三）

　足ひくわがせ勤多扶倍思(ツトメタブベシ)　（二・一二八）

さて、これらの敬語は自己の側には用ひぬのが常であるが、宣命や御製などには、御自身のことに敬語を用ひた例もある。それは至尊といふ御自覺をそのまゝ反映せしめた語法であると說かれる。

くはしくは「國語と國文學」第七十三號所載湯澤幸吉郎氏の「自己に敬語を用ひた古代歌謠等について」參照。

けれども次の例はどう解すべきか。

あかねさす晝は多多婢弖（タタビテ）ぬば玉の夜のいとまに摘める芹子これ　（二十・四四五五）

「多多婢弖」は「田賜びて」と解する說による。この歌の作者は班田の使葛城王であるが、田を賜ふことは陛下の事であり、作者は任ぜられてその事務を扱ふのであるから、そこで敬語を用ひたと見るべきであらうか。

「食ふ」「のむ」「着る」等の意の敬語に「をす」といふがあるといはれる。卷十二（三二一九）には、「妹食序念（イモヲシゾオモフ）」と「食」の字を助詞の「をし」にかりてゐる。古事記中卷に「まつり來し御酒（みき）ぞあさず袁勢（ヲセ）ささ」、書紀雄略天皇の卷に「臣の子はたへのはかまを七重鳴絁（ヲシ）」などあるが、萬葉にははつきりした例は見られない。

うつそを麻續王（をみのおほきみ）あまなれや伊良虞が島の珠藻苅麻須　（一・二三）

うつせみの命を惜しみ浪にぬれ伊良虞の島の玉藻苅食　（一・二四）

この五句を共に「タマモカリヲス」と訓む說もあるが、前を「タマモカリマス」、後を「タマモカリハム」と訓む說もある。後の歌は題詞によれば、麻續王の流されていますを哀しみ傷んで時の人が詠んだ前の歌を聞いて、王が感傷して和へられた歌といふことになつてゐるので、「カリヲス」と訓むと敬語が問題になる。これを王の御作でなく、やはり時の人が王の御作に擬して詠んだものとすれば問題ではなくなるが。

右の外には萬葉では專ら治め給ふ、統べ給ふといふやうな意に用ひてゐる。

須賣呂伎能乎須久爾奈禮婆（スメロギノヲスクニナレバ）　（十七・四〇〇六）

地ならば大君います……たにぐくのさ渡る極み企許斯遠周(キコシヲス)國のまほらぞ（五・八〇〇）

次に動詞について敬意を添へる助動詞であるが、四段に活用する「す」といふ語がある。通常四段活用の動詞の未然形について次の如く用ひられる。

わがせこは鵜川多多佐爾(タタサネ)（十九・四一九〇）

立田山御馬近づかば和周良志奈牟迦(ワスラシナムカ)（五・八七七）

今日今日と吾(あ)を麻多周良武(マタスラム)父母らはも（五・八九〇）

わが形見見つゝ之努波世(シヌバセ)（四・五八七）

中には承接に際して音の變化を來してゐるのもある。

をそろと吾を於毛保寒毳(オモホサムカナ)（四・六五四）

賢(さか)し女(め)をありと岐加志弖(キカシテ)麗(くは)し女(め)をありと伎許志弖(キコシテ)（記、上）

「おもほす」は後世「おぼす」となる。「きこす」は聞く意を離れて、「言ふ」の敬語としても用ひられる。

わがせこし斯くし伎許散婆(キコサバ)天地の神をこひのみ長くとぞ思ふ（二十・四四九九）

あふべしとあひたる君をな寝そと母寸巨勢友(キコセドモ)（十三・三二八九）

四段活用の動詞以外には例少く、且つ大抵音の變化を來してゐる。

國見し勢志氐(セシテ)　――爲(す)――　（十九・四二五四）

草枕旅やどり世須(セス)　――爲(す)――　（一・四五）

入り來て奈左禰(ナサネ)　——寢ぬ——　(十四・三四六七)

わが背子が盖世流(ケセル)衣　——着る——　(四・五一四)

大君の賣之(メシ)思野邊　——見る——　(二十・四五〇九)

「めす」は「見る」意のみならず、種々の意に用ひられる。

葦蟹を大君召跡(メスト)何せむに吾を召良米夜(メスラメヤ)　(十六・三八八六)

むなぎ取食(トリメセ)　賣世反也　(十六・三八五三)

藤原がうへに食國(をすくに)を賣之(メシ)賜はむと　(一・五〇)

櫻花今盛なり難波の海おしてる宮に伎許之賣須奈倍(キコシメスナベ)　(二十・四三六一)

やすみしゝわご大君の所聞見爲(キコシメス)そともの國の　(二・一九九)

「きこしめす」は、「きこしをす」と同意と考へられる。なほ次のは敬意をあらはす助動詞としての用法である。

神ながら於毛保之賣之弖(オモホシメシテ)　(十八・四〇九四)

遠くあれば一日一夜も思はずてあるらむものと於毛保之賣須奈(オモホシメスナ)　(十五・三七三六)

天皇(すめろぎ)の遠き御代にもおしてる難波の國に天の下之良志賣之伎等(シラシメシキト)　(二十・四三六〇)

後世は「しろしめす」といふが、萬葉のは皆「しらしめす」とある。

助動詞として用ひられる「ます」「たぶ」「たまふ」については既に述べた。「す」よりもこれらの方が敬意が強いといはれる。

〔二〕 謙　譲

1　體言に關するもの

これには餘り多くを見ることは出來ない。

あまざかるひなの夜都故(ヤツコ)に天人し斯く戀すらば生けるしるしあり（十八・四〇八二）

耆矣奴(オイタルヤツコ)吾が身一つに（十六・三八八五）

前は略解により、後は新訓によつた。

今日よりはかへりみなくて大君の之許乃美多弖(シコノミタテ)と出でたつ吾は（二十・四三七三）

これらはいづれも

住吉の小田を苅らす兒賤鴨無奴雖(ヤツコカモナキヤツコアレド)在妹が御爲と私田苅る（七・一二七五）

うれたきや志許霍公鳥(シコホトトギス)（八・一五〇七）

といふやうな語を轉用したものである。

2　用言に關するもの

敬意をあらはす「す」に對するやうな助動詞は無い。いづれも動詞で、中にそれが助動詞的になるものがあるだけである。

他國に君を伊麻勢弖(イマセテ)いつまでか吾が戀ひ居らむ時の知らなく（十五・三七四九）

敬語の「います」を下二段に活用させて使役的の意をふくませたので、「あらしめて」といふを丁寧にいふ心持である。

他の謙讓の語とは一寸氣持が變つてゐるやうだが、「君をいませて」の主は作者自身であり、それが尊敬せられるのではないからここに入れた。通常謙讓といふのは動作の主がひくめられることによつて、相手に對する敬意が生ずるのをいふのである。

針袋これは多婆利奴すり袋今は得てしか翁さびせむ（十八・四一三三）

玉にぬき消たず賜良牟秋萩のうれわくらばに置ける白露（八・一六一八）

「たぶ」「たまふ」が與へる側の語であるのに對して、これは受ける側の語であると思はれる。「たまはる」といふもある筈であるが、例を見ない。宣命などでは

授賜比負賜幣貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐弖（續紀一詔）

などある「受賜はる」が後に、「承はる」となるのである。

「言ふ」といふ意の謙語「申す」は古くはマヲスで後にマウスになつたことは既に（一五頁）のべたが、例はそこにもあげたが、なほ次のやうにも用ひられる。

萬代にいまし給ひて天の下麻乎志多麻波禰みかど去らずて（五・八七九）

續紀第十三詔にも「天下奏賜比」とあり、詔詞解に「天下の政を執り申す也」とある。これが次の如く動詞の下につゞけて助動詞的に用ひられると「言ふ」の意はなくなる。けれども間に助詞がはさまる場合があるのは、まだ助動詞になりきらぬしるしである。

いろけせる菅笠小笠わがうなげる珠の七つ緒取替毛將申物乎（十六・三八七五）

天とぶや鳥にもがもや都まで意久利摩遠志弖飛びかへるもの（五・八七六）

「たぶ」「たまふ」の反對で、「奉」「獻」等の意に用ひられる「まつる」といふ語がある。

となみ山たむけの神に奴佐麻都里吾がこひのまく（十七・四〇〇八）

古よ今のをつゝに萬調麻都流都可佐等作りたるそのなりはひを（十八・四一二二）

「たて」といふ語と熟して次の如く用ひられる。

多弖麻都流御調寶は數へ得ず盡しもかねつ（十八・四〇九四）

韓國に行きたらはして歸り來むますらたけをに御酒多氐麻都流（十九・四二六二）

「まつる」も亦原義を失つて、他の動詞の下に次の如く用ひられる。

泉の河の水脈絶えず都可倍麻都良牟大宮所（十七・三九〇八）

奉見而未だ時だにかはらねば年月のごと思ほゆる君（四・五七九）

零る雪の白髮までに大君に都可倍麻都禮婆貴くもあるか（十七・三九二二）

「つかへまつる」といふが最も多く、後世「つかうまつる」となり、更に「つかまつる」となつて榮える力を思はせてゐる。「たてまつる」も竹取物語などになると、

ここら大きさまで養ひたてまつる志おろかならず。

御送りの人々見たてまつり送りて歸りぬ。

といふやうにも用ひられるが、萬葉ではまださういふ例を見ない。

「行く」—「退き去る」の意に「まゐる」「まかる」といふのがある。

一日には千たび參入之東の大き御門を入りかてぬかも（二・一八六）

唐の遠き境につかはされ麻加利伊麻勢……（五・八九四）

わが背子しけだし麻可良婆白妙の袖を振らさね見つゝしぬばむ（十五・三七二五）

大日本國語辭典に、

敷きつゝ我が待つ君が事終り可敝利麻可利天（十八・四一一六）

を例に、「來るをいふ、謙遜の語」といふ解を二番目につけてゐるが、我が待つ君の動作で自分の動作でないのだから、一寸異様な感じである。これは久米朝臣廣縄が朝集使として入京し、事終つて任國越中に歸つた時、國守大伴家持が宴を催してその席で詠んだものであるから、新考に「朝廷を中心として中心より遠ざかるをマカリといふなり」といつてゐるのに從ふべきであらう。「三七二五」の歌もその心持で見るべきであらう。「まゐる」は「まゐ入る」の複合語、「まゐ」といふ語は、

山越え野ゆき都べに末爲之わがせを（十八・四一一六）

いやましに我は麻爲許牟年の緒長く（二十・四二九八）

山たづの迎へ參出六君が來まさば（六・九七一）

の如く用ひられる。

なほこれについては「國語・國文」第[illegible]卷第二號所載、[illegible]氏の「[illegible]」[illegible]參照。

以上で敬語の大體を終る。平安朝には對話に用ひる「侍り」「候ふ」等があるが、萬葉にはない。「侍り」は續紀第十詔に「天下爾立賜比行賜部流法波可絶事波無久有家利止見聞喜侍止奏賜」とあり、詔詞解に「侍とは天皇へ申給ふ詔なる故に、かなたへ對ひて、敬みての言也、此侍などは、後の文に、言の下に付ていふ侍にいと近し」とある。また「候ふ」のもととなる「さもらふ」はあるが、謙譲語といふやうにはなつてゐない。

本稿は、萬葉集講座卷三所載、石坂正藏氏の「萬葉集の尊卑表現の研究」に負ふ所が多い。

七　男女の言葉

萬葉集卷十三に次のやうな歌がある。

をはり田のあゆ道の水を間無くぞ人は汲むとふ時じくぞ人は飲むとふ汲む人の間無きが如飲む人の時じきが如吾妹子にわが戀ふらくはやむ時も無し（三二六〇）

反　歌

思ひやるすべのたづきも今は無し君にあはずて年のへぬれば（三二六一）

今案ずるに、この反歌、君にあはずと謂へるは、理に合はず。宜しく妹にあはずといひつべし。

菅の根のねもころごろに吾が念へる妹によりては言の禁も無くありこそと齋瓮を齋ひほりする竹珠を間なく貫き垂り天地の神をぞわが祈むいたも術なみ（三二八四）

今案ずるに、妹に因りてはといふべからず。まさに君に因りてはといふべし。何ぞとならば、すなはち反歌に
公がまにまにといへり

反　歌

たらちねの母にも謂はず包めりし心はよしゑ公がまにまに（三二八五）

最初の歌は男の歌であるのに、その反歌は「君にあはずに」とあつて女の歌となる故、「理に合はず」とし、その次は反歌の趣は女の歌でこれを「妹がまにまに」と改めても通じない、そこで長歌の方に「妹によりては」とあるのを難じたものである。これらの長歌と反歌とは元来別々なものであつたのが、どうかして一緒にされたのであつて、註者はそれを傳への通り一緒のものと見た故に理に合はずと見たのである。この註によつて考へられることは、古今集になると、

かすが野の祭にまかれりける時に物見にいでたりける女のもとに家をたづねて遣はせりける　壬生忠岑

春日野の雪間をわけておひ出でくる草のはつかに見えし君はも（戀一）

とあつて、明かに女のもとへやつた男の歌に、「君」といふ語を用ひ、伊勢物語でも、

昔男……かへり来る道に、やよひばかりに楓の紅葉のいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋の紅葉しにけれ

昔そこにはありと聞けど消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける

目には見て手にはとられぬ月の中の桂の如き君にぞありける

の如く、男から女への歌に「君」といつてゐるが、萬葉集ではさうは言はないものだといふことである。現にこの最後の歌も、萬葉集には「湯原王贈娘子歌」として、結句「妹をいかにせむ」（四・六三二）とあるのである。

かうはいふものの萬葉集にも男から女に「君」といつた例も無いわけではない。

大伴宿禰家持更贈紀女郎歌

うつたへに籬のすがた見まくほり行かむといへや君を見にこそ（四・七七八）

紀女郎贈大伴宿禰家持歌

戲奴（變云和氣）之爲わが手もすまに春の野にぬける茅花ぞめして肥えませ（八・一四六〇）

大伴家持贈和歌

わが君に戲奴は戀ふらしたばりたる茅花をはめどいややせにやす（八・一四六二）

これらは指明に男から女へ「君」といつた例である。けれどもここに注意すべきは、いづれも家持の歌で紀女郎との贈答であり、後の歌には「戲奴」といふ言葉が使つてあることである。「戲奴」は紀女郎から贈つて來た方の歌の註によつて「わけ」と訓むのであるが、意味はそれにあてた文字で知られるやうに、奴の意で、今はたはむれにこの語を用ひたのであるから「戲奴」と書いて註をつけたものと思はれる。從つてこの贈答は戲の氣分でなされたものだといふことが考へられる。初の歌にはさうした言葉は無いが、この歌は同じ題詞のもとに收められてゐる五首の中の一首で、前

には、

吾妹子がやどの籬を見に行かばけだし門よりかへしなむかも（四・七七七）

後には、

板蓋（いたぶき）の黒木の屋根は山近し明日（あすのひ）とりてもちまゐりこむ（四・七七九）

黒樹とり草も刈りつゝ仕へめど勤（イソシキ）和氣（ワケ）とほめむともあらじ（四・七八〇）

といふのがあり、この三首については、考・略解に別に贈詞があつたのがおちたのであらうと言つてはゐるが、とにかくこの四首はやはり戯の氣分が多いやうに思はれる。家持が「君」といふ語を用ひたのもその氣分が關係してゐるもので、これらを普通の眞面目な場合のものと一緒に考へることは出來ないやうである。男を呼び女を呼ぶ普通の言葉は男には「せ」女には「いも」といふのがある。これは元來

伊母毛勢母（いもせも）若き兒どもはをちこちにさわぎ泣くらむ（十七・三九六二）

の「妹もせも」が、男の兒も女の兒もといふ意であるやうに、男を意味し女を意味するものであつて、必ずしも男から女を「いも」といひ、女から男を「せ」と呼ぶと限るわけではない。同性間でも使ふのであり、從つて戀愛的關係のない男女間にも使ふのである。

丹比眞人笠麻呂往紀伊國超勢能山時作歌一首

たくひれの懸けまくほしき妹が名を此の勢の山にかけばいかにあらむ（三・二八五）

春日藏首老即和歌一首

宜しなへ吾が背の君がおひ來にし此の勢の山を妹とはよばじ　（三・二八六）

これは明かに男から男へ「吾が背の君」といつてゐる。

大津皇子竊下於伊勢神宮上來時大伯皇女御作歌

吾がせこを大和へ遣るとさ夜深けて曉露にわが立ちぬれし　（二・一〇五）

これは姉君大伯皇女が弟君大津皇子に對して「吾がせこ」と言はれたものである。

大伴田村大孃與坂上大孃歌

わがやどの秋の芽子咲く夕かげに今も見てしか妹がすがたを　（八・一六二二）

これは姉から妹へ用ひたもの。

大伴家持至姑坂上郎女竹田庄作歌

玉桙の道は遠けどはしきやし妹を相見に出でてぞわが來し　（八・一六一九）

この歌、略解に「妹は郎女のむすめをさす」とあるが、新考は「案ずるに妹は戀情を帶びざる場合にもいひしは勿論、目上の人に對してもいひしなり」といつて、坂上郎女をさすものとしてゐる。坂上郎女は家持の叔母であり且つその女坂上大孃は家持の妻である。

大伴坂上郎女宴親族之日吟歌

山守のありける知らに其の山に標ゆひ立てて結ひのはぢしつ　（三・四〇一）

大伴宿禰駿河麻呂卽和歌

山守はけだしありとも吾妹子が結ひけむ標を人解かめやも　(三・四〇二)

駿河麻呂と坂上郎女との歌は巻四(六四六・六四七・六四八・六四九)にもあり、左註に「右坂上郎女は佐保大納言卿の女なり。駿河麻呂はこれ高市大卿の孫なり。兩卿兄弟の家、女孫姑姪の族、これを以て歌を題し送答し、起居を相問ふ」とある。これによれば・

┌御行(高市大卿)─○─駿河麻呂
└安麻呂(佐保大納言)─坂上郎女

といふ關係になる。そして駿河麻呂は坂上郎女の女を妻としてゐる。かういふ關係で郎女に對して「吾妹子」といひ、「吾妹」(六四八)といつてゐるのである。

これらの例によつて、「妹(いも)」「せ」の語は同性間にも用ひ、異性間であつても戀愛的な關係なしにも用ひることは明であるが、最も普通には戀愛的な關係をもつ場合が多いのである。從つて、

防人に行くは誰がせと問ふ人を見るがともしさ物思もせず　(二十・四四二五)

さきはひの如何なる人か黒髪の白くなるまで妹がこゑを聞く　(七・一四一一)

の如く、夫・妻といふ意味において、第三者として用ひる場合もあるのである。

さて「妹・背」を男女間の用語として用ひるのに、「妹」の方は「吾妹(わぎも)」「吾妹子(わぎもこ)」の外、單獨に「妹」とも用ひるが、「背」の方は普通は單獨に用ひず、必ず「吾が背」「吾が背子」「吾が背の君」といふやうに用ひる。唯東歌には「伊加保世(イカホセ)」(十四・三四一九)といふのがあつて、「伊香保に住わが夫(セ)子といふ也」(略解)と解せられてゐるが、この歌は全體として

まだ定訓を得ないので、この語もかく訓み解することに一致してゐる譯でもなく、疑問である。東歌にはなほ「奈勢能古(ナセノコ)」といふのが一つ(三四五八)あり、また東歌と卷二十の防人關係の歌には「世奈(セナ)」といふのが若干あるが、これは別としておきたい。その他では卷十一に「恨　登思　狹名盤在之者(ウラミムトオモヒテセナハアリシカバ)」(二五二二)とあるのが例外となるだけである。それにしても「背」とだけは用ひられないといふのは、音數の關係もあらうが、親しみの氣分をあらはすとか丁寧にいふとかの心持が大いにあづかつてゐるものではあるまいか。なほこれらの語の使用度についに澤瀉先生の御調査によれば、「妹」の類が八百三十餘あるに對して、「背(せ)」の類は百二十餘にすぎず、そのかはり「君」といつたのが五百餘あるとのことである。

「いまし」といふ語は用例少く假名書の例は二つしかないが、それがいづれも女の歌である。

　垂乳根の母に障らばいたづらに伊麻思(イマシ)も吾も事なるべしや　(十一・二五一七)

　駿河の海磯邊(おしべ)に生ふる濱つづら伊麻思(イマシ)をたのみ母に違ひぬ　(十四・三三五九)

これに對して「な」といふ語は例がかなりあり、中には、

　千鳥鳴く佐保の河門の瀬を廣み打橋渡す奈我(ナガ)來と念へば　大伴坂上郎女ヨリ藤原麻呂ニ(四・五二八)

の如く女から男をさして言つたものも無いではないが、大部分は

　草枕旅に久しくなりぬれば汝(ナ)をこそ思へな戀ひそ吾妹　(四・六二二)

　下野(しもつけぬ)安素の河原よ石ふまず空ゆと來ぬよ奈(ナ)が心のれ　(十四・三四二五)

の如く、男から女へ用ひてある。

「います」といふ動詞は男が女に對して用ひた例が次の如くある。

大島の羽易の山にわが戀ふる妹者伊座(イモハイマス)と人の言へば　(二・二一〇)

うらめしき妹の命のあれをばも如何にせよとか鳰鳥の二人並びゐ語らひし心そむきて家社可利伊摩須(サカリイマス)(五・七九四)

家さかり伊麻須(イマス)吾妹をとどみかね山がくしつれ情神(こころ)も無し　(三・四七一)

しかしこれも注意すべきことは、いづれもその妻の死を悲しんでの作であるといふことである。これは死者に對する宗教的尊敬の心が含まれてのことと見られ、特別な場合とせらるべきである。これらの場合を除いては男から女に用ひた例はまづないやうである。

動詞・助動詞の「ます」も同様である。

うつそみと思ひし妹が灰にて座者(マセバ)　(二・二一三)

知らぬ火筑紫の國に泣く子なす慕ひ來座斯提(キマシテ)　(五・七九四)

葦屋のうなひをとめが……うつゆふの隱りて座在者(マセバ)　(九・一八〇九)

ふしの間も惜しき命を露霜の過麻之爾家禮(スギマシニケレ)　(十九・四二一一)

等はいづれも亡妻に對してか、傳説の人物に對してかの例で、特別な場合である。例外としては、

わが衣形見にまつるしきたへの枕をさけずまきて左宿座(サネマセ)　湯原王、娘子ニ(四・六三六)

追へどおへどなほし來鳴きて徒らに地に散らせばすべをなみ攀ぢて手折りつ見末世(ミマセ)吾妹子　家持、坂上大孃ニ(八・一五〇七)

秋さらば相見むものを何しかも霧に立つべく歎き之麻左牟(シマサム)　遣新羅使人、妻ニ、（十五・三五八一）

吾妹子は常世の國に住みけらし昔見しより變若餘爾家利(ヲチマシニケリ)　大伴三依、坂上郎女ニ、（四・六五〇）

これ位のものである。この中でも最後の例は「この時郎女は既に相當の年輩になつてゐたらしく、大伴三依の妻ではなく、從つて多少尊敬の氣持で用ひられたもの」と澤瀉先生は言つて居られる。さうすると眞の例外は前の三例といふことになる。

また動詞・助動詞の「たまふ」は、男女間の語としては用例が少いが、その中で男が女に用ひたと思はれるのは、

鈴が音のはゆまうまやのつゝみ井の水を多麻倍奈(タマヘナ)妹が直手(ただて)よ　（十四・三四三九）

だけ、「たばる」と訓んだのに、家持の戯の歌「給有(タバリタル)茅花をはめど」（八・一四六二）があるが、その他はいづれも女から男への例ばかりである。かくてこれらの語もまた、男女間の用語としては女から男へ用ひるのが普通だといふことになる。以下にそれらの例若干づつあげておかう。

いや遠く君之伊座者(キミガイマサバ)ありかつましじ　笠女郎、大伴家持ニ、（四・六一〇）

大船を荒海(あるみ)に出し伊麻須君(イマスキミ)つゝむことなく早可敝里麻勢(カヘリマセ)　（十五・三五八二）

これは遣新羅使人の妻などの作と思はれる。この次にこれに對する答への歌と見えて、

まさきくて妹がいはば沖つ浪千重に立つともさはりあらめやも　（十五・三五八三）

とある。

闇(やみ)夜ならばうべも不來座(キマサジ)梅の花咲ける月夜に伊而麻左自常屋(イデマサジトヤ)　紀女郎（八・一四五二）

河上のいつもの花の何時も何時も來益わが背子時じけめやも　吹芡刀自（四・四九一）

足ひく吾が背勤多扶倍思　石川女郎（二・一二八）

吾が背子がその名のらじとたまきはる命は棄てつ忘賜名（十一・二五三一）

吾が背子が歸り吉麻佐武時の爲命のこさむ和須禮多麻布奈　茅上娘子（十五・三七七四）

商變りしらすとの御法有らばこそわが下衣變賜米　娘子ウラミノ歌（十六・三八〇九）

さてまた敬語の助動詞といはれる「す」になると、殆ど男女の間に差がない。

此の岡に菜採須兒家きかな名告沙根　雄略天皇御製（一・一）

聞きつやと妹が問世流かりがねはまことも遠く雲隠るなり　大伴家持（八・一五六三）

山川を中にへなりて遠くとも心を近く於毛保世和伎母　中臣宅守（十五・三七六四）

うるはしと思ひし思はば下紐に結びつけもちて止まず之努波世　同（十五・三七六六）

吾が形見みつゝ之努波世あら玉の年の緒長く吾もしぬばむ　笠女郎大伴家持ニ（四・五八七）

あら玉の年の緒ゆけば今しはとゆめよ吾が背子わが名告爲莫　同（四・五九〇）

わが背子しけだしまからば白たへの袖を布良左禰見つゝしぬばむ　茅上娘子（十五・三七二五）

歩きよ道に相佐婆いろけせる菅笠小笠わがうなげる珠の七ツ條とりかへも申さむものを（十三・三八七五）

かくてこれを「います」「ます」「たまふ」等に比すると、大分輕い敬語だといふことが考へられる。澤瀉先生はこれについて、『す』といふ言葉が敬語といふよりもむしろ親しみの言葉として解釋すべき一證になりはしないかと思は

れる」といつてをられる。

以上述べた所は、「國語國文の研究」第十號にのせられた澤瀉先生の講演筆記「萬葉に於ける男女の言葉」によるもので、これで、當時の歌に於て男から女への言葉と女から男への言葉とには、かなり相異のあつたことが考へられるであらう。この事實はまた作者を推定する一つの根據ともなることで、先生はそこに次のやうな例をあげて説いてをられる。

朝霧にぬれにし衣ほさずして一人や君が山道越ゆらむ　（九・一六六六）

とあるは「崗本宮御宇天皇幸紀伊國時歌」とあつて前に從駕の人の歌が出てゐるが、これは略解に云つてる通り從駕の人の妻の都で詠んだもので、君とはその夫をさしたものである。同じやうに、

ほとゝぎす今朝のあさけに鳴きつるは君聞きけむか朝寢（あさい）かねけむ　（十・一九四九）

は作者未詳ではあるが女の作であり、

事繁み君は來まさずほとゝぎすなれだに來なけ朝戸開かむ　（八・一四九九）

は「大伴四繩宴吟歌」と題詞があつて、吟誦したのは男であるが原作者は女である。更に、

誰そ彼とわれをな問ひそ九月の露にぬれつゝ君待つわれを　（十・二二四〇）

は「人麻呂歌集中出」と左註にはあるが女の歌であつて、人麻呂歌集中に女の歌がまじつてゐることが考へられる。かういふ風に見てゆくと「君」の語によつて、作者の傳の疑や誤をも正す事が出來る場合もあるので、卷四の二首目にある長歌とその反歌とは、「崗本天皇御製」とあつて、岡本天皇即舒明天皇か、後岡本天皇即齊明天皇か疑問のあ

るものだが、その内容もさる事ながら、「君」の言葉が用ひられてゐる事によつても、作者の女たる事が考へられるので、從つて後岡本天皇の御作である事が推定せられる。又卷三にある「山部宿禰赤人歌六首」と題した中、

秋風の寒き朝けをさぬの岡こゆらむ君に衣かさましを　（三・三六一）

とあるは女の歌と見る事が出來、赤人の歌六首とはあるが、實は赤人のは五首であり、一首は女の作がまじつたのか、でなければ少くも女のための代作である。その事は同じ卷の黒人の八首の歌の中に、別に一首女の作（二七六の一本）が入つてゐる事によつても察せられる。それと同じく、卷九に宇合卿歌三首とあるが、その三首目

やましなの石田の小野のはゝそ原見つゝや君が山道越ゆらむ　（九・一七三〇）

は彼の作ではなく、彼の旅中に女が詠んだものであらうと思はれる、

更にこの考をすゝめてゆくと、代作の問題にふれる事が出來る。卷六にある「過敏馬浦時山部宿禰赤人作歌」とあるは反歌に、

すまのあまのしほやき衣のなれなばか一日も君を忘れておもはむ　（六・九四七）

とあつて、「君」の文字があり、その長歌の言葉づかひや内容から考へ合せてもこれは女の作のやうに思はれる。しかも赤人作と明記されてゐるところをもつてすると、これは女のために赤人が代作したものかと想像せられるのである。その事は卷四に、同時代の作者笠金村の作に「神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時爲贈從駕人所誂娘子作歌」（五四三）とあるによつても、當時、代作の行はれた事が明かであるからである。（中略）

春日野に友鶯の鳴き別れかへります間もおもほせわれを　（十・一八九〇）

は「人麿歌集出」と左註があるが、前の「誰そかれと」の場合と同じく人麿歌集中にまじつた女の歌と考へられる。又

湯原王歌

月よみの光に來ませあしひきの山をへだてゝ遠からなくに　（四・六七〇）

和歌

月よみの光はきよく照らせれど惑へる心たへじとぞおもふ　（四・六七一）

の作者について、古義には前者を娘子から湯原王に贈つたものとし、後者を湯原王の和歌としてゐる。これも敬語「ます」の用例が女の作たる事の傍證として役立ちはしないかと思はれる。（下略）

八　代名詞

以下私は語法的方面について述ぶべき順となつた。けれどもここでは當時の語法全般にわたつてのべるのでなく、代名詞・形容詞・動詞・助動詞・助詞等について、注意すべきことを述べるだけに止めたいと思ふ。ここでは奈良朝文法史、奈良朝文法概說（短歌講座第九卷所收）萬葉集品詞概說（萬葉集講座第三卷所收）等による所が多いことを、豫めお斷りしておく。

まづ代名詞について。

〔一〕人代名詞

自稱（第一人稱）には「あ」「あれ」「わ」「われ」「おの」「おのれ」等がある。これらの「れ」は後に附加したもので、

「あ」「わ」「おの」が基本的なものといはれる。

「あ」は單獨ではあらはれず、必ず助詞を伴ふ。その助詞は「が」最も多く「を」之につぎ「は」を伴つたのは極めて稀である。集中の確實な用例九十六個のうち、「は」を伴ふもの一例、「を」を伴ふもの十一例、他は全部「が」であると森本氏は數へられた。

　汝が母に嘖（こ）られ安波（アハ）ゆく青雲の出で來（こ）吾妹子相見て行かむ　（十四・三五一九）

　吾妹子や安乎（アヲ）忘らすな石上袖ふる河の絶えむと念へや　（十二・三〇一三）

「が」を伴ふものは次の如く種々に用ひられる。

　いやしき阿何微（アガミ）（我が身）　（五・八四八）

　天地は廣しといへど安我多米（アガタメ）は狹くやなりぬる　（五・八九二）

　安我其等久（アガゴトク）君に戀ふらむ人はさねあらじ　（十五・三七五〇）

　安我（アガ）思ふ妹にあはぬころかも　（十五・三六五〇）

　けしき心を安我（アガ）思はなくに　（十五・三五八八）

　家にゆきて如何にか阿我（アガ）せむ　（五・七九五）

　あは島のあはじと思ふ妹にあれや安宿（やすい）もねずて安我（アガ）戀ひわたる　（十五・三六三三）

「わ」は單獨で用ひられた例が東歌に唯一つある。その他はやはり助詞を伴ふ。

　うまぐたの嶺ろの笹葉の露霜の濡れて和（ワ）來なば汝は戀ふばそも　（十四・三三八二）

助詞は「は」も多い。「を」もあり、「に」もある。「に」は「あ」にはついた例がなかつた。

まかなしみさねに和波(ワハ)行く　(十四・三三六六)

廣はしを馬越しかねて心のみ妹がりやりて和波(ワハ)ここにして　(十四・三五三八)

玉藻なす靡きかぬらむ和乎(ワヲ)待ちがてに　(十一・二四八三)

新田山嶺(ね)にはつかなな和爾(ワニ)よそりはしなる兒らしあやにかなしも　(十四・三四〇八)

入間道の大屋が原のいはゐづら引かばぬるぬる和爾(ワニ)な絶えそね　(十四・三三七八)

(引かばぬれつつ安乎(アヲ)な絶えそね　(十四・三四一六)

やはり「が」を伴ふものが最も多いが、それも亦次の如く種々に用ひられる。

和我世故(ワガセコ)　(三・二四七)

和何則能(ワガソノ)に梅の花ちる　(五・八二二)

和我由恵(ワガユエ)に思ひなやせそ　(十五・三五八六)

和何可良(ワガカラ)に泣きし心を忘らえぬかも　(二十・四三五六)

け並べて見ても和我(ワガ)ゆく志賀にあらなくに　(三・二六三)

常にあらむと和我(ワガ)念はなくに　(三・二四二)

秋山の紅葉をかざし和我(ワガ)居ればうらしほ滿ち來(く)未だ飽かなくに　(十五・三七〇七)

奥山の眞木の板戸をとどとして和我(ワガ)開かむに入りきてなさね　(十四・三四六七)

何如にあらむ日の時にかも聲知らむ人の膝の上和我まくらかむ（五・八一〇）

あずの上に駒を繋ぎてあやほかど人妻兒ろをいきに和我する（十五・三五三九）

和期大王（一・五二）

これは下の「オ」にひかれて「ガ」が變音したのである。「わが妹」が「わぎも」、「わが家」が「わぎへ」となる類は前に述べた。

「あ」の方には、記紀などに「あぎ」（吾君の意）「あづま」（吾妻）など直接名詞に接した例がある。「わ」の方にはかうした例はない。後世「わぎみ」などいふ語が出來るが、萬葉にはさういふ例は無い。「吾子」（十三・三二九五）はそれで「あご」とよむ。ただ次のやうな例がある。

いかなるせなか和我理來むといふ（十四・三五三六）

「妹がり」「君がり」などいふ「がり」がついたものである。かくて「あ」と「わ」とを比較すると、「あ」の方が古いのではないかと思はれる。

さて、「あ」「わ」に「れ」がついて「あれ」「われ」となる時、「あ」「わ」と如何なる用法上の違があるか、これをとりまとめていふと、「あれ」「われ」は單獨で用ひられることが多く、助詞をとる場合にも種々の助詞を伴ふが、「が」助詞を伴ふことは絶對になく、從つて「あが身」「わが苑」といふやうに、助詞を伴つて體言の修飾語となることが絶對にない。また「あ妻」「あ子」「わがり」といふやうに直接に他の語につくいひ方もないのである。ただ「和禮由惠爾」（十五・三七二七）といふいひ方がある。以下用例を一つづつあげておく。

天地の神をこひつつ安禮(アレ)待たむ　(十五・三六八二)
梅の花さき散る園に和禮(ワレ)行かむ　(十八・四〇四一)
安禮乎(アレヲ)おきて人はあらじと　(五・八九二)
和禮乎(ワレヲ)おきてまた人はあらじと　(十八・四〇九四)
白雲にたちたなびくと安禮爾(アレニ)告げつる　(十七・三九五七)
山人の和禮爾(ワレニ)得しめし山づとぞこれ　(二十・四二九三)
からき戀をも安禮波(アレハ)するかも　(十五・三六五二)
時待つと和禮波(ワレハ)思へど月ぞへにける　(十五・三六七九)
人なみに安禮母(アレモ)なれるを　(五・八九二)
うつせみの世の人和禮母(ワレモ)そこをしもあやにくすしみ　(十八・四一二五)
もとな思ひし安連曾(アレゾ)くやしき　(十七・三九三九)
阿禮許曾波(アレコソハ)世のながひと　(記、下)
妹が袂を和禮許曾(ワレコソ)まかめ　(五・八五七)
安禮也(アレヤ)しか思ふ　(十四・三四七〇)
ふゝめりし花の初に來し和禮夜(ワレヤ)散りなむ後に都へゆかむ　(二十・四四三五)
和禮欲利母(ワレヨリモ)貧しき人の　(五・八九二)

和禮左倍爾君（ワレサヘニ）につきなな（十四・三五一四）

和禮乃未夜（ワレノミヤ）夜船はこぐ（十五・三六二四）

麻須良和禮須良（マスラワレスラ）…床にこいふし（十七・三九六九）

組みあはせてないのは、假名書のものにその例を見ないものである。

次に「おの」は用例も少く、且つ局してゐる、單獨にはあらはれず助詞「が」を伴ふか、直に體言に接して熟語となるかである。

意乃何身（オノガミ）（五・八八六）

於能我（オノガ）負へる於能我名（オノガナ）（十八・四〇九八）

於能豆麻（オノヅマ）(己妻)（十四・三五七一）

續紀第三十三詔には「於乃毛於乃毛（オノモオノモ）」といふ例がある。「おの／＼」「おのづから」等も「おの」から出た語である。これに「れ」がついた「おのれ」も例少く、集中には次の二つを見る。

伊夜彦於能禮（イヤヒコオノレ）神さび青雲のたなびく日すらこさめそぼふる（十六・三八八三）

於能禮故（オノレユヱ）のらえて居れば（十二・三〇九八）

ところで後の例は、新考に「オノレは汝といふにひとし」といつてゐるやうに見るのが、一首全體の調からみても自然なやうに思ふ。さうとすると、對稱に轉用したといふことになるが、一體この「おの」「おのれ」は、今は便宜上自稱に入れたが、山田博士が反射指示と名づけて區別してゐられるやうに、「あ」「あれ」「わ」「われ」とは心持が違つて、

「その者自身」といふ意のやうに考へられる。「わ」「われ」も後になると、

おとしめ疵をとめ給ふ人は多く、我が身はかよわく物はかなき有様にて、なかなかなる物思をぞし給ふ（源氏・桐壺）

里にてもわが方のしつらひまばゆくして君の出入し給ふにうちつれ聞え給ひつゝ（源氏・帚木）

いとなべてはあらねど我も思しあはすることやあらむ、うちほゝゑみて（同）

女をさしてその人と尋ね出で給はねば我も名のりをし給はで、いとわりなうやつれ給ひつゝ例ならずおりたちありき給ふはおろかには思されぬなるべしと見れば、我が馬をば奉りて御供に走りありく。（源氏・夕顔）

の如く川ひる例もあるが、萬葉集ではまだその例を見ないやうである。

草枕旅のまるねの紐絶えば安我(アガ)手とつけろこれの針持(はるも)し（二十・四四二〇）

この歌の四句について、新考が、

アガテトは己ガ手トにて、眞根自身ノ手ニテとなり。契沖が『アガは妻の我なり』といひ二註（○略解・古義）に『吾手ト思ヒテツケヨといふ也』といへるは誤なり。

と述べてゐるのは、この點に於て疑が入れられる。

對稱（第二人稱）には「な」「なれ」「いまし」「まし」等がある。前に少しく觸れたから、ここでは、「な」と「なれ」との差について奈良朝文法史の說を引いておくに止める。その差は大體「わ」と「われ」との差の如くである。

な　　なれ

熟語となる	熟語とならず
「が」助詞を伴ふ	「が」助詞を伴はず
單獨にて主語たらず	單獨にて主語たり
連體語となる	すべて連體語とならず

宣命には「美麻之(ミマシ)」といふ語があるが萬葉には見えない。又「大汝小彥名(オホナムチスクナヒコナ)」(三・三五五)――「於保奈牟知須久奈比古奈(オホナムチスクナヒコナ)」(十八・四一〇六)――といふを見ると、「なむち」といふ語もあつたと考へられるが、用例は見えない。

他稱(第三人稱)と認むべきはつきりしたものは例がないやうである。「し」といふのがあつて、

三枝の中にをねむとうつくしく志我(シガ)語らへば　(五・九〇四)

老人も女童兒も之我(シガ)願ふ心だらひに撫で賜ひ治め賜へば　(十八・四〇九四)

の如く用ひるが、これはまた

鵜河たち取らさむ年魚の志我(シガ)鰭(はた)は我にかきむけ念ひし念はば　(十九・四一九一)

秋の花志我(シガ)色々にめし給ひ明らめ給ひ　(十九・四二五四)

の如く人以外にも用ひて、何れを原義とも定め難い。

不定稱には「た」「たれ」がある。「た」は單獨では用ひられず、常に「が」助詞を伴ふに對して、「たれ」は單獨でも用ひられ、「を」「に」「ぞ」「か」等の助詞を伴つても用ひられるが、「が」を伴ふことは絶對にないといふちがひがある。

てりて立てるは愛(は)しき多我(タガ)つま（二十・四三九七）

誰乘流(タガノレル)馬の足の音ぞ（十一・二六五四）

み立たしせりし石を多禮(タレ)見き（五・八六九）

來鳴き渡るは誰喚兒鳥(タレヨブコドリ)（九・一七一三）

多禮乎可(タレヲカ)君と見つゝしぬばむ（二十・四四四〇）

多禮尓(タレニ)見せむと思ひそめけむ（十八・四〇七〇）

多禮曾(タレゾ)この屋の戸おそぶる（十四・三四六〇）

思ふ心を多禮賀(タレカ)知らむも（十七・三九五〇）

〔二〕 指示代名詞

近稱は「こ」を基本的なものとして「これ」（事物）、「ここ」（場所）、「こち」（方向）とある。

妹が紐結八川内(ゆふやかふち)を古の昔人見きと此乎(コヲ)誰か知る（七・一一一五）

旅にして妹に戀ふれば霍公鳥わが住む里に許欲(コヨ)鳴きわたる（十五・三七八三）

乎知可多(ヲチカタ)に妹らは立たし己乃加多(コノカタ)にわれは立ちて（十三・三二九九或本歌）

許能(コノ)山道は行きあしかりけり（十五・三七二八）

許能(コノ)照らす日月の下は（五・八〇〇）

山人の我に得しめし山つとぞ許禮(コレ)（二十・四二九三）

許禮乎（コレヲ）おきてまたはあり難し（十七・四〇一一）

針袋已禮波（コレハ）たばりぬ（十八・四一三三）

許禮也已能（コレヤコノ）名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふあま少女ども（十五・三六三八）

聞きし如まこと貴く奇（くす）しくも神さびをるか許禮能（コレノ）水島（三・二四五）

心のみ妹がり遣りて吾（わ）は已許（ココ）にして（十四・三五三八）

許已（ココ）念へば胸こそ痛め（八・一六二九）

撫で給ひ治めたまへば許已乎之母（ココヲシモ）あやにたふとみ（十八・四〇九四）

わが背子を乞許世山（コチコセヤマ）と人はいへど（七・一〇九七）

走出の堤に立てる槻の木の已知碁智乃枝（コチゴチノエ）の（二・二一〇）

妹もせも若き兒どもは乎知許知（ヲチコチ）にさわぎ泣くらむ（十七・三九六二）

「ここ」といふは場所をさすとせられてゐるが、この例で見るやうに、必ずしも空間的の場所に限らず、思想上のある點をさすこともある。また「こちごち」といふ語については、山田博士萬葉集講義卷二に、「こち」を重ねた語なるべき由を論じて、「さて何が故に、我等が今『アチコチ』といふべき所を『コチゴチ』といひしか。……當時『あち』といふ語未だなかりしが故なるべく思はる。即ちこの頃の文獻をみるに『コチ』といふはあれど、『ソチ』といふは見えざること奈良朝文法史に既にいへる所なり。而して、第三人稱の所謂遠稱の『あ』『あれ』といふ語は全く當時に發生してあらず。同じく遠稱に『か』『かれ』はあれど、發達十分ならざるなり。又たとひ『か』『かれ』ありとても、『かち』といふ語

は古來なき所なれば、これを用ゐて方向を示す語は、全く成立せざりしなり。されば第三人稱の方向を指す語としては當時『コチ』の一語のみなれば、これを種々の場合に用ゐるより外に方法なき筈なり。」とある。

右の外に、假名書の例は見えぬが「此方彼方(コナタカナタ)」(九・一八〇九)といふ語がある。

次に中稱は、「そ」を基本として「それ」「そこ」「そち」がある。また「そ」に關係があると考へられる「し」といふ語があつて、人を指しても物をさしても用ゐられることは前(七二頁)に述べた。これは「が」助詞と共にのみ用ひられることも前に例示した如くである。

人妻とあぜか曾乎(ソヲ)いはむ　(十四・三四七二)

秋風の吹かむ曾能(ソノ)月あはむものゆゑ　(十五・三五八六)

衣こそは其破(ソレヤ)れぬればつぎつゝもまたもあふといへ　(十三・三三三〇)

吾妹子に戀ひつゝ居れば春雨の彼毛(ソレモ)知るごと止まず降りつゝ　(十・一九三三)

わが岡の龗神(おかみ)に言ひて零らしめし雪のくだけし彼所爾(ソコニ)ちりけむ　(二・一〇四)

薦刈るとあまの小船は入江こぐかぢの音高し曾己乎之毛(ソコヲシモ)あやにともしみ……白雲のたなびく山を岩根ふみ越えへなりなば戀しけくけの長けむぞ則許(ソコ)思へば心し痛し　(十七・四〇〇六)

引放つ箭の繁けく大雪の亂れて來れ　一云霰なす曾知(ソチ)より來れば　(二・一九九)

「そち」の例はこの一つである。また「それ」には假名書の例を見ない。「そこ」の意義については、「ここ」の場合と同じことが考へられる。

遠稱は「か」を基本として「かれ」がある。又假名書の例はないが、「彼方(カナタ)」(九・一八〇九)といふのがある。

曉(あかとき)の加波多例(カハタレ)時に　(二十・四三八四)

可能(カノ)兒ろと寢ずやなりなむ　(十四・三五六五)

あが思ふ君が御船かも加禮(カレ)　(十八・四〇四五)

用例は非常に少い。發達がまだ十分でないのである。「かはたれ時」は「彼は誰時」の意で、今の例に入れた。また方向をあらはすに「をち」といふ語があつた。乎知可多(ヲチカタ)(十三・三二九九)知乎知許(ヲチコチ)(十七・三九六二)といふやうに他の語と熟して用ひられる。乎底母許乃毛(ヲテモコノモ)(十七・四〇一一)の「モ」は面で、「ヲテ」は「ヲチ」の轉と考へられる。

最後に不定稱であるが、これは「いづ」を基本として「いづれ」「いづく」「いづち」等がある。

伊豆由(イヅユ)かも愛(かな)しきせろがわがり通はむ　(十四・三五四九)

霍公鳥伊頭敝(イヅヘ)の山を鳴きか越ゆらむ　(十九・四一九五)

「いづ」だけの例はこの二つ、いづれも場所をさして用ひられ、「いづゆ」は「何處(イヅク)より」、「いづへ」は「何處邊(イヅクヘ)」(十三・三二七七)の意である。

百鳥の來居て鳴くこゑ春されば聞きのかなしも伊豆禮乎可(イヅレヲカ)わきてしぬばむ　(十八・四〇八九)

何都禮(イヅレ)乃島にいほりせむわれ　(十五・三五九三)

伊頭禮(イヅレ)乃時かわが戀ひざらむ　(十七・三八九一)

梅の花散らくは伊豆久(イヅク)　(五・八二三)

伊豆久欲利（イヅクヨリ）來りしものぞ（五・八〇二）

たらちしの母が目見ずておほほしく伊豆知（イヅチ）むきてかあが別るらむ（五・八八七）

「いづ」に關係ある語で「いづら」といふ語がある。

石田野に宿する君家人の伊豆良（イヅラ）とわれを問はば如何にいはむ（十五・三六八九）

例はこれ一つである。普通「何處」と同じやうに考へられてゐるが、後世の、

昔めしよせて、昨日まちくらしゝを猶相思ふまじきなめりと怨じ給へば、顔うちあかめてゐたり。いづらとのたまふに、しか〳〵と申すに……（源氏・帚木）

いづらおそしとたび〳〵仰せらるれば（宇津保・樓上上）

といふやうな用法をみると、佐々政一博士が、

これは「ら」と云ふ良行音から云へば、事物の指示であるべきであるが、「いづれ」とは全く異つた語で、多くは「ドウシタ」といふに似た場合に用ひる。言海にはイヅレ、イヅコと注し、雅言集覽には「ドコニ、ドコニアル、ドウヂヤと問ひかくる詞、句にして讀む」とある。ドコニと讀んでも通ずるところもあるが、ドウシタと讀めば、總て通ずるやうである。これは代名詞といふよりも寧ろ副詞と見做すべきものであらう。（「文章研究錄」所收　日本文法概論）

といつてをられるのが注意せられる。

磯の上に根はふむろの木見し人を何在登問者（トトハバ）語り告げむか（四・四四八）

の「何在」を「イヅラ」とよむのも、この考によるとき自然である。

また別に「なに」といふ語がある。この「な」は、

奈曾(ナゾ)こばいの寢らえぬも獨ぬればか（十五・三六八四）

奈騰可聞(ナドカモ)妹に告らず來にけむ（四・五〇九）

等の「な」と同じもので、「なに」も元來は副詞であつたのが、代名詞にも用ひられるに至つたのではないかといはれてゐる。

家にゆきて奈爾乎(ナニヲ)語らむ（十九・四二〇三）

山かひに咲ける櫻を唯一目君に見せてば奈爾乎可(ナニヲカ)思はむ（十七・三九六七）

これらは代名詞としての例である。最も普通には次の如く用ひられる。

足引の山も近きを霍公鳥月立つまでに奈仁加(ナニカ)來鳴かぬ（十七・三九八三）

九　形容詞

文語の形容詞の活用は、語尾だけ示すと

ク活用	＝く	＝く	＝し	＝き	＝けれ
シク活用	＝しく	＝しく	＝し	＝しき	＝しけれ

といふことになつてゐる。萬葉集でもこの活用形はそろつてゐる。

なぐさむる心し奈久波天さかるひなに一日もあるべくもあれや（十八・四一一三）

梅の花絶ゆること奈久咲きわたるべし（五・八三〇）

現にはあふよしも奈子（五・八〇七）

綿奈毛伎布かた衣（五・八九二）

かへしやる使奈家禮婆持てれどもしるしをなみとまたおきつるかも（十五・三六二七）

戀之久者形見にせよとわが背子がうゑし秋芽子花咲きにけり（十・二一一九）

忌忌久毛吾は歎きつるかも（十二・二八九三）

かけまくの由由志恐伎住吉の吾が大御神（十九・四二四五）

かけまくも忌之伎鴨一云由遊志計禮杼母（二・一九九）

けれどもこの時代はまだかうした形になりゆく過渡の時代といふべく、その已然形はまだ用ひられた數も少く、後世の如く「こそ」の結にも用ひられない。

已が妻こそ常目頬次吉（十一・二六五一）

最も今こそ戀は爲便無寸（十一・二七八一）

野を廣み草こそ之既吉（十七・四〇一一）

見ろがおそぎの有ろこそ要志母（十四・三五〇九）

さうしてまた別に「――け」「――しけ」といふ形があつて、未然形と已然形とに用ひられてゐた。殊にそれが推量の助

動詞「む」、打消の助動詞の一形である「なく」に接するなどは、頗る興味深い用法である。

　戀之家婆（コヒシケバ）形見にせむと　（八・一四七一）

　なか〳〵に死なば夜須家牟（ヤスケム）　（十七・三九三四）

　旅といへば言にぞやすき少くも妹に戀ひつゝ須敝奈家奈久爾（スベナケナクニ）　（十五・三七四三）

右は未然形としての用例である。

　玉桙の道の等保家波（トホケバ）間使もやるよしも無み　（十七・三九六九）

　玉きはる命遠志家騰（ヲシケド）せむすべも無し　（五・八〇四）

　足引の山來へなりて等保家騰母（トホケドモ）心し行けば夢に見えけり　（十七・三九八一）

右は已然形としての用例である。また四段活用の動詞を、例へば「いはく」「思はく」といふと同じいひ方がある。

　いつしかも人となりいでて安志家口（アシケク）も與家久（ヨケク）も見むと大船の思ひ頼むに　（五・九〇四）

　足引の山道越えむとする君を心に持ちて夜須家久母奈之（ヤスケクモナシ）　（十五・三七二三）

　吾妹子に戀ふるに吾は玉きはる短き命も乎之家久母奈思（ヲシケクモナシ）　（十五・三七四四）

この「――け」「――しけ」といふ形は東歌・防人歌では「――か」「――しか」といふ形になることもある。

　かくだにも國の登保可婆（トホカバ）汝目欲りせむ　（十四・三三八三）

　わが行の伊伎都久之可婆（イキヅクシカバ）足柄の嶺はふ雲を見ととしぬばね　（二十・四四二一）

　さぬ山に打つや斧音（をのと）の等抱可騰母（トホカドモ）寐もとか兒ろがおゆに見えつる　（十四・三四七三）

梓弓欲良の山邊の之牙可久爾妹ろを立ててさねど拂ふも　（十四・三四八九）

連用形と「あり」と熟して、所謂形容動詞をなしたものもある。假名書の例はあまり多くは無いが。

神からやそこば尊き山からや見我保之加良武　（十七・三九八五）

いよよ益々加奈之可利家理　（五・七九三）

初雪は千重にふりしけ故非之久の於保加流われは見つゝしぬばむ　（二十・四四七五）

天地の神は無可禮也愛しきわが妻さかる　（十九・四二三六）

形容詞の語根に「み」をつけて、次の如く用ひるのは、この時代の特徴として注意せられることの一つである。

吾妹子を去來見乃山乎高三香裳やまとの見えぬ國遠見可聞　（一・四四）

采女の袖吹きかへす明日香風京都乎遠見いたづらに吹く　（一・五一）

獨ねて絶えにし紐を忌見跡せむすべ知らにねのみしぞ泣く　（四・五一五）

「國遠み」の如く間に「を」がなくても、「ゆゝしみと」の如く下に「と」があつても、意味はかはらない。この語がどういふ性質の語であるかは説のあるところで、遽に定め難いが、意味は「山を高み」は「山が高さに」「山が高いので」「國遠み」は「國が遠さに」「國が遠いので」といふやうに見てよいといはれてゐる。けれども

あすかの舊き都は山高三河とほしろし　（三・三二四）

などはそれでは一寸具合が惡く、單に「山高く」といふ程の意と考へられる。この形は右の外になほ種々の用法がある。

まづ、例はあまり多くはないが、體言につゞけて用ひる。

泊瀬川速見早湍を掬びあげて飽かずや妹と問ひし君はも（十一・二七〇六）

秋されば故非之美伊母乎夢にだに久しく見むを明けにけるかも（十五・三七一四）

朱鳥此云阿訶美苔利（紀・天武天皇朱鳥元年）

また「思ふ」につゞけて用ひる。

吾妹子を相知らしめし人をこそ戀のまされば恨三念（四・四九四）

面白見我を思へかさ野つ鳥來鳴きかけらふ……名津蚊爲迹我を思へか天雲も行きたなびきぬ（十六・三七九一）

意味は後の例で「なつかしと思ふ」と相對してあるので、相似たものと察せられる。又「爲」につゞけて用ひる。

絶ゆと言はゞ和備染責跡（四・六四一）

白妙の袖の別を難見爲而荒津の濱にやどりするかも（十二・三二一五）

これは後世、

少しもかたちよしと聞きては見まほしうする人どもなりければ（竹取物語）

ひとつ子にさへありければいとかなしうし給ひけり（伊勢物語八四段）

などいふと同様の意味と思はれる。

またこの「――み」といふ言ひ方は、形容詞的活用の助動詞「べし」「まじ」にも見られる。

霍公鳥鳴く羽ぶりにも落奴倍美袖にこきれつ藤浪の花（十九・四一九三）

秋芽子を落過沼蛇手折りもち見れどもさぶし君にしあらねば（十・二二九〇）

暫久乃間毛　忘得（ワスレウ）未之白美奈毛（マシジミナモ）悲備賜比（續紀、五八詔）

十　動　詞

動詞の活用はその種類からいふと、現在の文語九種の活用のうち、下一段活用を除く他の八種が存在したといはれてゐる。文語下一段活用は「蹴る」であるが、この語は日本書紀神代巻に、「蹴散　此云倶穢簸邏邏筒須（クヱハララカス）」とあるので、ワ行下二段活用であつたと推測せられる。萬葉には見えない。

さて活用の種類は八種あるといつても、これをこまかく見るとき、ハ行上一段活用はまだなくて、これに屬する「乾」「嚔」の意の「ひる」は上代にはハ行上二段活用ではなかつたかと、橋本進吉氏は論ぜられた。

「國語・國文」創刊號「上代に於ける波行上一段活用に就いて」參照。

この説は、上代における特殊假名遣の研究から起り、書紀卷七、景行天皇十二年の條に、

市乾鹿文　乾此云賦

とあることと、萬葉の

わが背子にわが戀ひ居ればわが宿の草佐倍（クササヘ）思浦乾來（オモヒウラブレニケリ）（十一・二四六五）

の下句が從來訓み難いものにせられてゐたが、「乾」を上二段活用と見、その已然形「フレ」を借りたものとして右の如く訓む時に、はじめて意味が通ずることとによるもので信ずべき説である。少くとも萬葉集をはじめ上代の文獻に、これが上一段活用であつたことを示す例は無いのである。

かく見て來ると、活用の種類は前述の如くであるが、それに屬する一語一語については、種々かはつた現象がある。即ち「隱る」「忘る」「觸る」等は後世は皆下二段活用になつてゐるが、當時には四段活用としての用例もあり、むしろその方が古形かと考へられるし、また「佩ぶ」「紅葉づ」等は後世は上二段活用になつてゐるが、上代には四段活用ではなかつたかと推定せられる。

　四段活用の動詞の已然形と命令形とは從來同じ形と考へられてゐたが、上代に於ける特殊假名遣の研究から、これは同じ形ではないことが、橋本進吉氏によつて明にせられた。（「國語と國文學」第八十九號「上代の文獻に存する特殊の假名遣と當時の語法」）。即ち四段活用の語尾で特殊假名遣の關係する已然形の語尾「け」「へ」「め」は橋本氏の所謂乙類の假名、命令形の語尾「け」「へ」「め」は甲類の假名といふやうに、判然と假名が書分けてあるのである。（この假名の類別は、本講座三宅氏の「假名遣の研究」中にも紹介せられてゐる。）この特殊假名遣は他の動詞の語尾にも夫々關係し、或は動詞の活用を決定し、或は動詞の解釋を決定する上に、重大な指針となることが多い。例へば前に紹介したハ行上一段活用の否定は、カ行マ行の上一段活用にあつては、各活用形に通ずる「き」「み」は甲類の假名であらはされてゐるのに對して、類推から行けば當然甲類の假名であらはさるべきハ行上一段にあつては、終止形以下の例はないが、未然形連用形ともに乙類の假名が用ひられ、而してこの乙類の假名は上二段活用の未然形連用形に用ひらるべきものであるといふ點が、最初の疑問を投げかけたものであり、また

　とこしへに君も阿閇椰毛いさなとり海の濱藻の寄る時々を（紀、（紀、允恭天皇十一年）

の歌の「阿閇椰毛」は從來命令形「あへ」に「やも」がついたものとして苦しい解釋が與へられてゐたのを、橋本氏が反語

として適切な解釋を下された（「早稲田文學」昭和二年十二月號）のも、この「閇」が乙類の假名であるから、「あへ」は已然形と見るべきものであるといふことから導かれてゐるのである。

さて動詞の各活用形の用法は後世と餘り違はない。唯、命令形は、現在では四段に活用するもの以外は、「よ」をつけることになつてゐるが、上代のものには「よ」をつけない例も多い。

大伴の遠つ神祖(かむおや)のおくつきはしるく標多底(しめタテ)人の知るべく（十八・四〇九六）

家人は可敞里波也許(カヘリハヤコ)といはひ島いはひ待つらむ旅ゆく我を（十五・三六三六）

あしがりのまゝの小菅の菅枕あぜかまかさむ許呂(コロ)勢手枕（十四・三三六九）

これはまた動詞的活用をする助動詞の命令形においても同様である

たむけの神にぬさまつり吾(あ)がこひのまく……撫子が花の盛に阿比見之米等曾(アヒミシメトゾ)（十七・四〇〇八）

また、已然形が順接條件をつくる場合は、後世は助詞「ば」をとるのがきまりであるが、上代には「ば」のつかない例も多くあり、それが古い形ではないかと考へられる。これもまた動詞的活用をなす助動詞においても同じことである。

引き放つ箭の繁けく大雪の亂而來禮(ミダレテキタレ)まつろはず立向ひしも露霜の消なば消ぬべく行く鳥のあらそふはしに（二・一九九）

家さかりいます吾妹をとゞみかね山隱都禮(ヤマカクシツレ)情神(ココロド)もなし（三・四七一）

天傳ふ入日刺奴禮(サシヌレ)丈夫(ますらを)と思へる吾もしきたへの衣の袖は通りてぬれぬ（二・一三五）

吾背子がかく戀禮許曾(コフレコソ)ぬば玉の夢に見えつゝいねらえずけれ（四・六三九）
さゆり花後(ゆり)もあはむと於毛倍許曾(オモヘコソ)今のまさかもうるはしみすれ（十八・四〇八八）
念戸鴨(オモヘカモ)胸安からぬ戀列鴨(コフレカモ)心の痛き（十三・三二五〇）
奈爾須禮曾(ナニスレゾ)母とふ花の咲き出來ずけむ（二十・四三二三）
心さへ消失多列夜(キエウセタレヤ)言も通はぬ（九・一七八二）
家人の伊波比麻多禰可(イハヒマタネカ)豈かもあやまちしけむ……君が根の荒き島根に宿(やどり)する君（十五・三六八八）

この場合は右の例で見る如く、「こそ」「ぞ」「や」「か」等の係助詞を伴ふ場合が多いので、接續助詞の「ば」も元來は係助詞「は」であつたのではないかと推測せられる。

また上一段活用の動詞が、助動詞「らむ」「らし」「べし」、助詞「とも」に接する時、後世なら終止形からするのであるが、この時代には次のやうになる點、この時代の特徴と考へられる。

若鮎(わかゆ)釣る妹らを美良牟(ミラム)人のともしさ（五・八六三）
春日野に煙立つ見ゆをとめらし春野のうはぎ摘みて煮良思文(ニラシモ)（十・一八七九）
ひぐらしの鳴きぬる時は女郎花咲きたる野邊を遊吉追都見倍之(ユキツツミベシ)（十七・三九五一）
乎敷(をふ)の埼漕ぎたもとほり終日(ひねもす)に美等母(ミトモ)飽くべき浦にあらなくに（十八・四〇三七）

またこの時代に注意せられることの一つは「――く」といふいひ方である。形容詞の場合は「――けく」といふ形になることは既に（八〇頁）のべた。動詞においては、四段に活用するものはその未然形から、「歎(なげ)かく」（十七・四〇〇八）、

「偲(しぬ)ばく」(十九・四一九五)、「散(ち)らく」(五・八二三)、「有(あ)らく」(五・八〇九)といふやうになり、その他のものにあつては終止形から「らく」とつづいて、「さ寝(ね)らく」(十四・三三五八)、「解(と)くらく」(二十・四四二七)、「告(つ)ぐらく」(十七・四〇一一)といふやうになる。ただ上一段活用の動詞は、「見(み)らく」(七・一三九四)といふやうになる。

助動詞に於ても同様で、「けり」「り」等は未然形から、「有りけらく」(四・七三八)、「逢(あ)へらく」(十四・三三五八)、となり、「つ」「ぬ」「しむ」等は終止形から、「かざしつらく」(十八・四一三六)、「年の經ぬらく」(十五・三七一九)、「思はしむらく」(十・二二五〇)と「らく」の形をとる。また「む」「ず」は「まく」「なく」となつて、「かけまく」(五・八一三)、「告げなく」(十九・四二〇七)の如く用ひられるので、「む」の活用を動詞の四段活用に近いと考へ、打消の助動詞にナ行四段に活用するもののあつたことを考へるもととなるのである。「き」は「しく」となつて、「思へりしく」(四・七五四)の如く用ひられ、これだけが例外の形となつてゐる。これらのうち、「らく」となるものの「ら」については、安藤正次氏の説が「日本文學論纂」にあり、また私も臆說を「萬葉集講座言語研究篇」の中に述べておいた。またこの「く」についても種々の說があるが、意味は大體は「こと」といふやうに見てよいとせられてゐる。次にその用法の大體を見るに、

人こがす有雲(アフクモ)しるしかづきするをしとたかべと船の上にすむ (三・二五八)

潮滿てば入りぬる磯の草なれや見良久(ミラク)少く戀良久(コフラク)の多き (七・一三九四)

心をし無何有の鄕におきてあらば藐姑射(はこや)の山を見末久(ミマク)近けむ (十六・三八五一)

吾背子を何處行かめとさき竹の背向(そがひ)に宿之久(ネシク)今しくやしも (七・一四一二)

妹が目の見まく欲家口(ホシケク)夕闇の木の葉ごもれる月待つごとし (十一・二六六六)

これらはいづれも主語として用ひられてゐる。

奈氣可久乎とどめもかねて　（十七・四〇〇八）

わがここだ斯奴波久知らに　（十九・四一九五）

家の妹ろ吾をしのぶらしま結びにゆすびし紐の登久良久思へば　（二十・四四二七）

道のしりこはだ嬢子は争はず寝斯久袁しぞもうるはしみ思ふ　（記、中）

何時しかも人となり出でて安志家口毛與家久母見むと　（五・九〇四）

かくしつゝ在久乎よみぞたまきはる短き命を長く欲りする　（六・九七五）

最後の例は、ここにおくには異説もあるが、かりにここにおいた。これらは所謂他動詞の客語として用ひられてゐる。

前の主語として用ひられた例と共に、「――く」といふ形が名詞として用ひられてゐるわけである。

梅の花夢に加多良久みやびたる花とあれ思ふ酒に浮かべこそ　（五・八五二）

家見れど家も見かねて里見れど里も見かねてあやしみとそこに念久家ゆ出でて三年のほどに垣もなく家うせめやと此の箱を開きて見てばもとのごと家は有らむと玉くしげ少しひらくに　（九・一七四〇）

汝多知乎召而　屢　詔志久　朕後爾大后爾能仕奉利助奉禮止　詔伎　（續紀、十七詔）

これは、今も漢籍よみなどに「……曰く」などと用ひられてゐる用法である。「語らく」は「語ることには」、「思はく」は「思ふことには」といふやうに換言せられる。

めづらしき人に見せむと黄葉を手折りぞわが来し雨零久仁　（八・一五八二）

紅の濃染（こぞめ）の衣（きぬ）を下にきば人之見久爾（ヒトノミラクニ）にほひ出でむかも　（十一・二八二八）

ぬばたまの妹が乾（ほ）すべく安良奈久爾（アラナクニ）わが衣袖（ころもで）をぬれていかにせむ　（十五・三七一二）

相見ては月毛不經爾（ツキモヘナクニ）戀ふといはばをそろと吾を思ほさむかも　（四・六五四）

み吉野の山のあらしの寒久爾（サムケクニ）はたや今夜（こよひ）もわがひとり寢む　（一・七四）

「に」を伴うて副詞的修飾語をなしてゐる。「雨の零らくに」は「雨の降るのに」、「月も經なくに」は「月も經ないのに」、「寒けくに」は「寒いのに」といふ意に見られてゐる。

梓弓欲良（よら）の山邊の之牙可久爾（シゲカクニ）妹ろを立てゝさ寢處（ねど）拂ふも　（十四・三四八九）

「しげかくに」は「しげけくに」であることは既に（八一頁）述べた。この意味を、新考に「茂カルモノヲといふ意なり」といつてゐるのは、前揭の諸例から見れば當然さうなる譯であるが、私はこれを「繁き處に」の意と見る方が、一首全體から見て自然なやうに思ふ。かう考へるとき、この「く」を奈良朝文法史に說いて、「ここ」「そこ」「いづく」などいふ「こ」「く」と同じく場所をあらはすもので、それは單純に空間をあらはすだけでなく、思想上のある點を指示することが多い――この事については既に述べた「ここ」「そこ」の條を（七四頁）參照――といふことを例證して、

今これを以てかの「く」にあて試みむに、體言とせるは「その點は」又は「その點を」などいふ意にあたり、修飾語となれるは「その點には」といへるをあつべく、大むね、この意にて通ぜざるものなきなり。なほかくいふ確たる例は、

鳥梅能波奈知良久波伊豆久（ウメノハナチラクハイヅク）　（萬五、）

といへるは確に場所をさしたるものにして、次のは「く」と「そこ」と對せり。

伎奈加奈久曾許波不怨（萬、十九）

この故に、余は「く」を以て場所を示すものとし、慣用の久しきにつれて種々の意義用法を呈するに至れるものとなさんとす。

と言はれてゐるのを面白く思ふのである。そして前の「雨の零らくに」以下の例も、丁度後世場所をあらはす「ところ」といふ語を、

艶めしき折々、待顔ならむ夕暮などのこそ見所はあらめ（源氏・帚木）

同じくはわが力入りをし直しひき繕ふべきところなく心に叶ふやうもやと（同）

少し思す所やありけむ、出でありき給ふにも家のうちにても大臣の作法をふるまひ給はず（大鏡・時平）

磨墨にまさる馬こそなかりけれと嬉しう思ひて見る所に、こゝに生食とおぼしき馬こそ一騎出で来たれ（平家・巻九　宇治川の事）

の如く種々の意味に用ひ、延いては、「いくら勉強したところで彼には及ばぬ」といふやうにも用ひるやうになると同じ心持で、「雨のふらくに」は「雨のふる時に」、「月も經なくに」は「月も經ぬ所に」といふやうな心持から起つて、「雨の降るのに」「月も經ないのに」といふやうに逆接的な意味に用ひられるやうになつたものとは考へられまいかと思ふのである。

さてまた、

み吉野の玉松が枝ははしきかも君が御言を持ちて加欲波久（二・一一三）

足引の山田守る翁がおく蚊火の下こがれのみ余戀居久(ワガコヒヲラク)　（十一・二六四九）
世間(よのなか)の苦しきものに有家良久(アリケラク)戀にたへずて死ぬべき思へば　（四・七三八）
さを鹿の小野の草伏いちじろくわがとはなくに人乃知良久(ヒトノシレラク)　（十・二二六八）
草枕旅に久しくあらめやと妹にいひしを年の倍奴良久(ヘヌラク)　（十五・三七一九）
春霞たなびく田ゐに廬付きて秋田刈るまで令思良久(オモハシムラク)　（十・二二五〇）
磯毎にあまの釣舟はてにけり我が船はてむ磯の之良奈久(シラナク)　（十五・三八九二）
足引の山の黄葉(もみぢ)にしづくあひて散らむ山道を君之越麻久(キミガコエマク)　（十九・四二二五）
浪のむた靡く玉藻の片思にわが念ふ人の言乃繁家口(コトノシゲケク)　（十二・三〇七八）

これらは

ももしきの大宮人のまかり出て遊ぶ今夜(こよひ)の月の清左(サヤケサ)　（七・一〇七六）
松浦川玉島の浦に若鮎(わかゆ)つる妹らを見らむ比等能等母斯佐(ヒトノトモシサ)　（五・八六三）
「かゝるすき事をし給ふこと」と謗りあへり。　（竹取物語）
「何處のさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけき事」とつまはじきをして　（源氏・帚木）

と同じやうな言ひ方で、詠嘆の意をもつ。これに更に助詞「に」をつけて

飫宇(おう)の海の河原の千鳥汝(な)が鳴けばわが佐保河の所念國(オモホユラクニ)　（三・三七一）
庭にふる雪は千重しく然(しか)のみに思ひて君を吾(あ)が麻多奈久爾(マタナクニ)　（十七・三九六〇）

足がりの刀比(とひ)の河内に出づる湯のよにもたよらに児ろが伊波奈久爾(イハナクニ)　（十四・三三六八）

の如くいふ。これは「なくに」といふが殆ど全部を占めてゐる。前の副詞的修飾語に用ひた同じ形と考へ合せると、餘情として、「それだのに……」といふ逆の氣持のものがあるやうにも思はれるが、必ずしもさうとは限らない。

十一　助動詞

助動詞はこれを全體として見れば、動詞的活用をするもの、形容詞的活用をするもの、獨特な活用をするもの等があり、その活用もまた活用形の用法も、後世のものと餘りかはらない。（動詞的活用をするものについては既に動詞の條に併せ述べた）。けれども個々の語について見るとき、平安朝には語形の變化をもたぬ推量の「らし」が、

いにしへも然なれこそうつせみも妻を相格良思吉(アラソフラシキ)　（一・一三）

うべしこそ見る人毎に語りつぎ偲家良思吉(シヌビケラシキ)　（六・一〇六五）

の如く「らしき」といふ形——これは形容詞の類推から連體形と考へられるが、皆「こそ」の結としてのもので、連體的用法の例は見えない——をもつてゐたり、時の「けり」が、

妻もあらばつみてたげまし佐美(さみ)の山野の上のうはぎ過去計良受也(スギニケラズヤ)　（二・二二一）

の如く「けら」といふ未然形をもつてゐたり、またこの「けり」が、

おろかにぞ我は思ひし乎布(をふ)の浦の荒礒のめぐり見れど安可須介利(アカズケリ)　（十八・四〇四九）

の如く「ず」をうけて用ひられたり、完了の「り」と言はれるものの命令形があつて、

秋さらばわが船泊てむ忘貝よせ來て於家禮（オケレ）沖つ白浪（十五・三六二九）

白妙の我（あ）が下衣失はず毛弖禮（モテレ）わがせこ直（たゞ）にあふまでに（十五・三七五一）

の如く用ひられるなどのちがひはなほある。けれども今は上代の助動詞の一々について詳説することを得ないから、この時代として特に注意すべき二三の語について述べるにとゞめたいと思ふ。

まづ受身や可能をあらはすものについて、これは後世は「る」「らる」であるが、この時代には「ゆ」「らゆ」といふのもあつて、それが古形であると思はれることである。活用は「る」「らる」と同樣下二段活用で、動詞へ接續するし方も「る」「らる」と同じ關係である。

か行けば人に伊等波延（イトハエ）かく行けば人に邇久麻延（ニクマエ）……（五・八〇四）

心ゆも思はぬ人の衣に須良由奈（スラユナ）（七・一三三八）

見るに志良延奴（シラエヌ）うま人の子と（五・八五三）

鳴きゆく鳥のねのみし奈可由（ナカユ）（五・八九八）

妹を思ひ伊能禰良延奴爾（イノネラエヌニ）秋の野にさを鹿鳴きつ妻思ひかねて（十五・三六七八）

「らゆ」の用例は最後の一つだけである。射られた鹿といふ意味の語に「伊喩之々（イユシシ）」（紀、齊明天皇四年）といふのがあり、「見ゆ」の「ゆ」もこれであらうと考へられるので、或は「ゆ」が古く「らゆ」は後の發達ではないかと想像せられる。またこの「ゆ」「らゆ」が可能の意味に於ては、多く自然的可能または自發などいはれる意味に用ひられてゐるのも注意すべきである。この「ゆ」の承接に際して上の動詞の語尾の音がかはることがある。

瓜はめば子供意母保由（五・八〇二）

はその例である。「聞ゆ」といふ語なども、「聞かゆ」から變つたものと思はれる。「おもほゆ」は、「おもほす」が後に「おぼす」となるやうに、後に「おぼゆ」となつて行くのである。また「あらゆる」「いはゆる」等の「ゆる」も元來はこのゆの連體形である。

この外に可能をあらはす形はといふと、動詞に「かつ」「あふ」「う」等がある。なほ不可能をあらはす「かぬ」——これは「渡金目八」（四・六四三）「忘可禰津藻」（一・七二）の如く、未然形と連用形の例しか見えぬやうである——といふ語もある。この中で「かつ」に就て一言しておきたい。これは獨立の用例は萬葉集には見えなくて、古今集戀一に、

沫雪のたまればかてに碎けつゝわが物思のしげきころかな

とあるのが、わづかに獨立の動詞であつたことを示してゐるだけである。萬葉では常に動詞の下につけて用ひられて、助動詞と見てよい位になつてゐる。下二段活用と推定せられるが、用例は未然形と終止形とがあるだけである。それも肯定に用ひられたのは、

おほさかにつぎのぼれる石群を手越しにこさば固辭介氐務介茂（紀、崇神天皇十年）

だけ、萬葉集では常に否定の助動詞と共に用ひられてゐる。

春されば我家の里の川門には年魚子さ走る君麻知我豆爾（五・八五九）

朝露の消易き我が身他國に須疑加弖奴可母親の目を欲り（五・八八五）

鳴くとりはいやしき鳴けど降る雪の千重に積めこそ吾等立可氐禰（十九・四二三四）

あらたまのきべのはやしになを立てて由吉可都麻思自（ユキガツマシジ）いを先立たね　（十四・三三五三）

この中の「がてに」を意味によつて「難」又は「難爾」と書いてゐることが多いが、それによつて「がてに」は形容詞「かたし」の語幹に助詞「に」がついたものと考へることは誤である。

　「國學院雜誌」第十六卷第九・十・十一號所載　橋本進吉氏「がてぬ」「がてまし」考による。

次に使役をあらはすのは「しむ」であつた。

恨めしく君はもあるか宿の梅の散り過ぐるまで美之米受（ミシメズ）ありける　（二十・四四九六）

足引の山行きしかば山人のわれに依志米之（エシメシ）山づとぞこれ　（二十・四二九三）

布施おきて吾はこひのむあざむかずたゞに率（ゐ）ゆきて天道思良之米（シラシメ）　（五・九〇六）

平安朝時代以後に用ひられる下二段活用の「す」「さす」はまだなかつたといはれてゐる。けれどもサ行に活用する動詞の中には、

竹敷の玉藻奈婢可之（ナビカシ）こぎ出なむ　（十五・三七〇五）

安寢（やすい）ねしめず君を奈夜麻勢（ナヤマセ）　（十九・四一七七）

霍公鳥今も鳴かぬか君に伎可勢牟（キカセム）　（十八・四〇六七）

荒き風浪に安波世受（アハセズ）平らけく率てかへりませ　（十九・四二四五）

の如きものがある。いづれも使役的の意味をもつなかに、殊に後の二つは活用の上からも後の「す」を思はせることが強い。かう思ふ時に、

くやしかもかく知らませばあをによし國中ことごと美世摩斯（ミセマシ）ものを（五・七九七）

などは「ゆ」の場合の「射（い）ゆ」「見ゆ」の如く、「さす」といふ語が後の發達であることを思はせるものであらうか。

さて「ゆ」「らゆ」は勿論、「る」「らる」「しむ」も後世の如く敬語の助動詞として用ひることは全くなかつた。敬語の助動詞には、四段に活用する「す」があり、動詞から轉來したものに「たまふ」その他があることは既に述べた。

過去をあらはす「き」は

き　し　しか

と活用することになつてゐるが、ずつと古くは「け」といふ未然形があつたのではないかと考へられてゐる。

つぎねふ山城女のこくはもちうち大根根白の白ただむき麻迦受祁婆（マカズケバ）許曾知らずとも言はめ（記、下）

過去の推量をあらはす「けむ」は、この「け」に「む」がついたものであらうと考へられる。また

十月雨のまも置かず零爾西者（フリニセバ）誰が里のまに宿か借らまし（十二・三二一四）

筑波嶺にわが行利世波（ユケリセバ）ほととぎす山彦とよめ鳴かましやそれ（八・一四九七）

等の「せ」を「き」の未然形として、これは元來カ行系統の「け」「き」と、サ行系統の「せ」「し」「しか」と二種のものであつたのでないかと奈良朝文法史には說かれてゐる。「せ」を「き」の未然形と見る人は他にもあるが、またサ行變格の動詞「爲（す）」の未然形の特別な用法と見る說もある。更に最近森本治吉氏は萬葉集講座第三卷二一〇頁に於て

ほととぎす無かる國にもゆきてしがその鳴くこゑを聞けば苦しも（八・一四六七）

等の「しが」の「し」について述べ、

山田博士(日本文法講義其他)武田博士(「しか」「てしか」考)は過去の助動詞キの連體形と説かれる。しかしシガ、テシガに過去の意は無いと思はれるから、私はこれは「古に梁(やな)打つ人の無有世代(ナカリセバ)此處にもあらまし柘のさ枝は(三卷三八七)」「斯からむとかねて思里世婆(シリセバ)越の海のありその浪も見せましものを(十七卷三九五九)」のセと連絡があると思ふ。憶測が許さるれば、佐行變格動詞の「す」と同活用の助動詞で、語勢を強め或は意味を確實に言ひ現す爲に使つてゐたものと考へる。

といふ新見を出された。とにかく、「せ」を「き」の未然形とすることはなほ考ふべきことである。

「べし」に對する打消として、平安朝には「まじ」といふのがあるが、この時代にはそれはまだ無かつたのではないかと言はれてゐる(山田博士萬葉集講義卷二、四五頁)。その代り「ましじ」といふのがあつて、これが「まじ」のもとをなすのである。この語は宣命には、

敢末之時止爲弖(アフマシジトシテ)　(二六詔)
己我得麻之字岐帝乃尊岐寶位(オノガウマシジキミカドノタフトキクラヰ)(一本)　(四五詔)

など用ひられてゐるのであるが、歌には無いものとせられてゐた。それを發見せられたのは橋本進吉氏で、前に引いた「がてぬ」「がてまし」考に論ぜられてゐる。

堀江越え遠き里まで送りける君が心は和須良由麻之自(ワスラユマシジ)　(二十・四四八二)
かくばかりもとなし戀ひば故郷に此の月ごろも有勝益士(アリカツマシジ)　(四・七二三)

打消の助動詞「ず」は、

ず　ず　ず　ぬ　ね

と活用することになつてゐるが、上代には前に述べた如く「なく」といふ形があり、その「な」が未然形と考へられる。東歌にある打消の助動詞「なふ」もこの考を助けるものである。また「に」といふ語があつて、連用形と考へられる。かくてこれも四段に活用するナ行系統のものと、ザ行系統の「ず」とが混一して現在の「ず」の活用をなしたといふやうに考へられる。ではその連用形の「ず」と「に」とはどう違ふかといふに、「ず」の方は

玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみ阿良波佐受阿利吉（アラハサズアリキ）（五・八五四）

足（あ）の音世受（セズ）行かむ駒もが（十四・三三八七）

物毛波受（モハズ）やすく寝（ね）る夜はさねなきものを（十五・三七六〇）

の如く、副詞的修飾語に用ひられた場合、全く形容詞の連用形と同様に狀態を示すに用ひられるが、「に」の方は、

晝はもうらさびくらし夜はもいきづき明かし嘆けども世武爲便不知爾（セムスベシラニ）戀ふれども相因乎無見（アフヨシヲナミ）大島の羽易の山に吾が戀ふる妹はいますと人の言へば石根さくみてなづみこしよけくもぞなき（二・二一〇）

嘆けども知師乎無三（シルシヲナミ）念へども田付乎白二（タヅキヲシラニ）たわやめと言はくもしるく手童のねのみ泣きつつ（四・六一九）

春されば吾家の里の川とには年魚子（あゆこ）さ走る君麻知我弖爾（マチガテニ）（五・八五九）

涙をのごひ咽びつゝ言問すれば群鳥の伊涅多知加弖爾（イデタチガテニ）とどこほりかへり見しつつ（二十・四三九八）

の如く、原因・理由といふやうなものをあらはし、恰も形容詞の語幹に「み」をつけて、

吾妹子をいさみの山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも（一・四四）

といふやうに用ひるのと同じやうな氣持である。殊にここにあげた最初の二例が、「あふよしをなみ」「しるしをなみ」といふ語と相對して用ひられてゐることは注意すべきである。且つ

白たへの袖泣きぬらしたづさはり和可禮加弖爾等（ワカレガテニト）引きとゞめ慕ひしものを　（二十・四四〇九）

鶯の麻知迦弖爾勢斯（マテガテニセシ）梅が花　（五・八四五）

皇子の宮人歸邊不知爾爲（ユクヘシラニスル）　（二・一六七）

稻日野も去過勝爾思有者（ユキスギガテニオモヘレバ）心戀しき可古の島見ゆ　（三・二五三）

の如く、「と」「爲（す）」「思ふ」等につづくのも、「——み」といふ語と全く同じである。

最後にこの時代に特別な助動詞の一つに、「ふ」といふのがあつて、ハ行四段に活用し繼續の心持をあらはすといはれてゐる。これも敬語の「す」と同様に、專ら四段活用の動詞の未然形につくのである。

天地と共に久しく住波牟（スマハム）と思ひてありし家の庭はも　（四・五七八）

鳰鳥の二人ならびゐ加多良比斯（カタラヒシ）心そむきて家さかりいます　（五・七九四）

紅葉（もみぢば）の知良布（チラフ）山邊　（十五・三七〇四）

愛（うつく）しくしが可多良倍婆（カタラヘバ）　（五・九〇四）

東歌の打消の助動詞「なふ」もこの「ふ」がついて出來たものと思はれる。これもまた承接に際して音の變化を起させることがある。

あれをおきて人は有らじと富已呂倍騰（ホコロヘド）　（五・八九二）

梅の花雪にしをれて宇都呂波牟可母（十九・四二八二）

四段活用以外の動詞では、「流る」について、

沫雪かはだれにふると見るまでに 流倍散波何の花ぞも（八・一四二〇）

といふのがある。かうなると助動詞といつてとりはなす譯に行かない。活用も下二段で特別である。

次に助動詞の活用表を添へておく。怱卒に拵へたもので、不完全なものではあるが、紙數の都合で說明を省いた所が幾分でも補はれればと思ふ。なほこれらのうち「む」「らむ」「けむ」「らし」「まし」「じ」「ましじ」等の推量の意味については大抵の文法書が說いてゐるが、私も萬葉集講座第三卷で私見を述べた。

助動詞活用表

助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令	
敬語	す	タクサネ（四一九〇）	ワスラシナムカ（八七七）	キミハワスラス（三四九八）	ナツマスコ（一）	きかせかも（六八〇）	シヌバセ（五八七）	四段活用
繼續	ふ	スマハム（五七八）	カタラヒシ（七九四）	カクサフベシヤ（一八）	ナゲカフワガセ（三九七三）	カタラヘバ（九〇四）		
	ゆ		イトハエ（八〇四）	スラユナ（一三三八）				

受身・可能			使役	時				
らゆ	る	らる	しむ	つ	ぬ	たり	り	けり
ネラエヌニ（三六七八）	イハレヌモノ（十三部）	ワスラレズ（四三二二）	ミシメズ（四四九六）	アヒミテバコソ（三二五〇）	サキテチリナバ（八二九）	ウヱタラバ（三九一〇）	ハシワタセラバ（四一二六）	スギニケラズヤ（二二一）
ワスラエニケリ（八八〇）	イハレシキミ（五六四）		エシメシ（四二九三）	キキテケムカモ（三六七五）	チリテキ（三九九三）	ヘグテタリケレ（四〇七三）	ヤドレリシ（七）	
ナカユ（八九八）	イハルベキアレ（二十七部）		まさらしむ（一九四六）	フネマチカネツ（三〇）	ケナガクナリヌ（八五）	ヤスミコエタリ（九五）	ツララニウケリ（三六二七）	ケフニシアリケリ（八三六）
オモハユルカモ（八六六）	オモハルルカモ（三三七二）		こひせしむるは（二五八四）	シヌビツルカモ（四六五）	ヤドリヌルキミ（三六九三）	サキタルソノ（八一七）	サケルサクラ（三九六七）	アレニケルカモ（二三四）
				ミツレドモ（一六五二）	ナリヌレド（三六〇四）	キヱウセタレヤ（一七八二）	ハナモサケレド（一六）	イヒケレバ（一七四〇）
			シラシメ（九〇六）	コトツクシテヨ（六六二）			モテレ（三七五一）	
下二段活用						ラ行變		

指定	打消	推量				比況	
なり	ざり	べかり	べし	らし	ましじ	ごとし	ず
アフモノナラバ(三七三一)	アハザラメヤモ(三七四二)	ナヅベカラズヤ(佛足跡)					[illegible]シユカズバ(三六三〇)
アガミナリケリ(四〇七八)	さかざりし花(一六)	あるべかりける(三二五九)	アルベクアリケル(三七三九)			ヌギツルゴトクフミヌギテ(八〇〇)	シヌバズテワガコエユケバ(二九一)
イクサナリトモ(九七二) オトスナリ(三六二四)			ツトメクブベシ(一二八)	イマタタスラシ(三)	ワスラユマシジ(四四八二)	ナガルルゴトシ(八〇四)	ミレドモアカズ(五六)
スルガナルアベノイチヂ(二八四) ナキテイヌナル(八二七)	ならざるは(一〇二)	あふべかるよひ(二〇三九)	シヌベキオモヘバ(三九六三)	コソ…アラソフラシキ(一三)	ヨルマシジキカハノクマグマ(仁徳紀)	チリヌルゴトキワガオホキミ(四七七)	コトトハスキ(八一一)
ヨノコトナレバ(八〇五) ユクナレド(四八六)	アハザレド(三七七五)						イマダハキネド(三三六)
格活用		形容詞活用					特

打消	時	推量			
じ	き	む	けむ	らむ	まし
（イソノシラナク）（三八九二）	マカズケバコソ（記）	（チラマクヲシミ）（八二四）	（カタリケマクハ）（四一〇六）		アラマセバ（三五七九）
タドキヲシラニ。（三七七七）					
ヒトハアラジ。（八九二）	アラハサズアリキ（八五四）	マタカヘリミム。（三七）	ソコニチリケム。（一〇四）	マツハシルラム。（一四五）	チチトリミマシ。（八八六）
シカニハアラジカ（八〇〇）	ミシヒト（四四八）	イハムスベ（七九四）	スレケム。山ノシヅク（一〇八）	コフラムトリ（一一二）	ユカマシモノヲ（三五七九）
	ユキシカバ（一四四三）	子ニシカメヤモ（八〇三）	コソ…イハレケメ（三一二）	ヒトコソミラメ。（一二三二）	
殊	活	用			

◇片假名にもと假名書のもの、平假名は然らざるもの、用例の見えぬものは、すべてあけておいた。
◇「たまふ」その他轉成のものは省いた。
◇「めり」が（十四・三四五〇）に一つ見えるが、この表には省いた。
◇咏嘆の「けり」「なり」等は特に分けなかつた。
◇「ましじ」を推量に入れ、「じ」を打消に入れた類、便宜に從ふところが多い。

十二　助　詞

助詞の分類は山田博士に從つてゆかうと思ふ。もはや殘の紙數も愈々少くなつたので、極めて大略の記述しか出來ない。

（一）格助詞

これに屬するものは「の」「が」「つ」「な」「い」「を」「に」「へ」「と」「ゆり」「ゆ」「より」「よ」「から」がある。「の」「が」は體言について、その體言が他の體言に對する關係を示し　またはその體言が主語であることを示すのが最も普通な用法である。

1　樂浪之思賀乃辛碕さきくあれど大宮人之船待ちかねつ（一・三〇）

2　うちなびく波流能也奈宜と和我夜度能烏梅能波奈とを如何にかわかむ（五・八二六）

3　丹管士乃將薫時能櫻花將開時爾（六・九七一）

4　伊毛何美斯あふちの花（五・七九八）

1 2の中の「の」「が」は前の例、3の「乃」と4の「が」とは後の例である。一體に「が」は「の」に比して用ひられる範圍が限られてゐる。

3の「能」の方は1 2のと同じ類のものであるが、上下同等のものとして重ねられてゐるのが一寸樣子がかはつてゐる。これは「時」といふ體言の上に長い修飾語がついてゐるので考へにくいが、修飾語と合せて一の體言と見れば分り

易いであらう。この例に屬するものには次の如きものがある。

天地の初の時之（トキノ）久方の天の河原に八百萬千萬神の神集ひ集ひいまして神はかりはかりし時に　（二・一六七）

風交り雨ふる欲乃（ヨノ）雨交り雪ふる欲波（ヨハ）すべもなく寒くしあれば　（五・八九二）

白雲のたなびく國之（クニノ）青雲の向伏す國乃（ノ）天雲の下なる人は　（十三・三三二九）

また「の」「が」が主語につく場合は、その述語は連體語となつて――３４の如く――ゐるか或は副詞的修飾語となつてゐるか、或はさうして或る文の一部分となつてゐない場合でも、連體止めになつてゐるか、上に係詞があつて結が連體形や已然形になつてゐるか、或は「――く」「――くに」といふやうになつてゐるか、とにかく普通の終止法をとらぬことは注意すべきである。「國語國文の研究」第二十二號の拙稿・「萬葉集講座」第三卷一〇九頁の森本氏の解說等參照。

家にありて母何（ガ）とり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも　（五・八八九）

あずの上に駒を繫ぎてあやほかど人妻兒ろをいきにわ我（ガ）する　（十四・三五三九）

歎きつゝますらをのこの戀禮許曾（コフレコソ）わが髮結乃（モトユヒノ）ひぢてぬれけれ　（二・一一八）

大海のいそもとゆすり立つ波のよらむと思へる濱之淨奚久（ハマノキヨケク）　（七・一二三九）

遙々に思ほゆるかも然れどもけしき心を安我毛波奈久爾（アガモハナクニ）　（十五・三五八八）

わが園の李の花か庭にふるはだれ能（ノ）未だ殘りたるかも　（十九・四一四〇）

この最後の例のやうに「かも」が疑問の場合はあるが、咏歎の場合の例はない。古今集になると、

川風の涼しくもあるかうちよする波と共にや秋は立つらむ　（秋上）

といふやうな例が見える。

また「の」に就いては「の如く」の意をあらはす場合が注意せられる。「露の命」（十七・三九三三）といふやうないひ方は普通であるが、

紫草能（ムラサキノ）にほへる妹　（一・二一）

青山を横ぎる雲之（ノ）いちじろく吾とゑまして人に知らゆな　（四・六八八）

といふやうな言ひ方は歌にのみ限る特別ないひ方である。

河上に洗ふ若菜之（ノ）流れきて妹があたりの瀬にこそよらめ　（十一・二八三八）

これも同じである。若菜のことを言つてゐるのでなくて、「我もしこの若菜ならばあの如く……」と云ふ心持である。もしこの場合若菜のことをいふのならば、「若菜は」といふべきである。

難波人葦火たく屋之（ヤノ）すしてあれど己が妻こそ常めづらしき　（十一・二六五一）

難波人葦火たく屋はすゝたれど己が妻こそとこ珍らなれ　（拾遺集四）

前者は上三句は家の様子と共に妻の様子をいつてゐるのであるが、後者は家の様子だけをいつてゐることになるのである。

「つ」「な」は體言について、それが他の體言に對する關係を示すものであるが、いづれも當時すでに用法が限られ、助詞としてとり出すよりも、全體を一の熟語とみるがよい位になつてゐる。

樂浪（サヾナミ）の國都美神（クニツミカミ）　（一・三三）

於伎都渚（オキツス）　（十四・三三四八）
麻奈迦比（マナカヒ）　（五・八〇二）
美奈曾己（ミナソコ）　（二十・四四九一）

「い」は主格を示すものといはれる。

いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐伊波奏せしひがたりとのる　（三・二三七）
わが背子があとふみ求め追ひ行かば紀の關守伊とゞめなむかも　（四・五四五）

「を」は所謂他動詞の客語をあらはすに用ひるものであるが、その他にも種々の用法がある。

たらちねの母乎別れてまことわれ旅のかりほに安く寢むかも　（二十・四三四八）
久方の雨のふる日乎たゞひとり山邊に居ればいぶせかりけり　（四・七六九）
石田野に宿する君家人のいづらと我乎とはば如何にいはむ　（十五・三六八九）

「に」も種々な意味に用ひられるが、多くは今もある用ひ方である。

この岡爾菜つます兒　（一・一）
人二知らゆな　（四・六八八）
なかなかに人とあらずは酒壺二成りてしかも酒二染みなむ　（三・三四三）

「戀ふ」といふ語には、「に」を用ひて

君爾戀ひいたもすべなみ　（三・四五六）

といふのは今から思ふと異樣に感じるであらう。また次のやうな用法もある。

鏡なす吾が見し君を阿婆の野の花橘の珠爾拾ひつ（七・一四〇四）

山高み白木綿花爾おちたぎつ夏身の河門見れどあかぬかも（九・一七三六）

道の邊の草を冬野丹履みからしわれ立ち待つと妹に告げこそ（十一・二七七六）

久方の雨はふりしく瞿麥がいや初花爾戀しきわがせ（二十・四四四三）

「へ」は方向を示す。

わが背子を大和邊遣るとさよふけて曉露にわが立ちぬれし（二・一〇五）

「と」は種々に用ひられる。

香具山は畝火を愛し等耳梨與相あらそひき（一・一三）

年魚つる等立たせる妹が裳のすそぬれぬ（五・八五五）

あさりするあまの子ども等人は言へど見るに知らえぬ貴人の子等（五・八五三）

御苑生の百木の梅の散る花し天に飛びあがり雪等ふりけむ（十七・三九〇六）

「ゆり」「ゆ」「より」「よ」は皆同じやうに用ひられる。「ゆ」は「ゆり」の略體、「よ」は「より」の略體と言はれ、「ゆ」「ゆり」と「よ」「より」とでは、「ゆ」「ゆり」の方が古形であると言はれる。萬葉集の假名書の例で見ると「ゆり」は一つ（一本をまぜて二つ）、「ゆ」は三十四、「より」は四十、「よ」は十四（「國語國文の研究」に於ける吉澤先生の御調査による）といふことになつてゐる。「より」が後までのこる勢力あることを暗示してゐるに對し、「ゆり」は既にほろびかけ、略體

「ゆ」が歌として音律をととのへる必要上使用せられたといふやうに考へられる。

月よみの光を清み神島のいそまの浦由船出すわれは（十五・三五九九）

ますらをの清きその名を古欲今の現に流さへる親の子どもぞ（十八・四〇九四）

「から」といふと今の口語のやうな感じがするが、古い語である。

霍公鳥鳴きて過ぎにし岡び可良秋風吹きぬよしもあらなくに（十七・三九四六）

（二） 副助詞

「だに」「さへ」「すら」「まで」「のみ」「ばかり」がこれに屬してゐる。

「だに」

霍公鳥汝太爾來鳴け（八・一四九九）

三輪山をしかも隱すか雲谷裳情あらなむかくさふべしや（一・一八）

夢谷何かも見えぬ（十一・二五九五）

「せめて汝だけでも」「せめて雲だけでも」「せめて夢にでもと思ふその夢にさへ」といふやうな心持で、あげ示した點を强くいふ言葉である。

夢爾谷見ざりしものをおぼほしく宮出もするか佐日の隈回を（二・一七五）

如此谷裳吾はこひなむ（三・三七九）

朝ゐでに來鳴く貌鳥汝谷文君に戀ふれや時をへず鳴く（十・一八二三）

これらは希望の心は無いのであるから、「現實には勿論夢にさへも」「これほどまでも」「お前までも」といふやうに考へられる。

「さへ」

一二の目のみにあらず五六三四佐倍（サヘ）あり雙六のさえ　（十六・三八二七）

人目多みあはなくのみぞ情左倍（サヘ）妹を忘れてわが思はなくに　（四・七七〇）

「すら」

蒼天ゆかよふわれ須良（スラ）汝が故に天の河道をなづみてぞ來し　（十・二〇〇一）

夕されば葦邊にさわぎあけくれば沖になづさふ鴨須良母（スラモ）妻とたぐひて我が尾には霜なふりそと白たへの羽さしかへてうちはらひさ寢（ぬ）とふものを　（十五・三六二五）

「まで」

都摩提（マデ）おくり申して飛びかへるもの　（五・八七六）

あが衣下にを着ませただにあふ麻弖爾（マデニ）　（十五・三五八四）

「のみ」

み雪ふる冬は今日能未（ノミ）　（二十・四四八八）

おと能未爾（ノミニ）ききて目に見ぬ布勢の浦を見ずは上らじ年は經ぬとも　（十八・四〇三九）

「おとにのみ」といはず「おとのみに」といふやうに、「に」をあとにいふのが當時のいひ方である。

「ばかり」

可久婆可里（カクバカリ）すべなきものかよの中の道　（五・八九二）

今二日許（バカリ）あらば散りなむ　（八・一六二一）

「かく」「しか」「いか」といふやうな語についたのが大部分である。

（三）　係助詞

「は」「も」「ぞ」「なも（なむ）」「こそ」「や」「か」「な」等がある。これらは係となると共に文の終にも用ひられる。

けれども「は」は

さるさがなきえびす心をみてはいかがはせむは　（伊勢物語）

さてその文は殿上人みなみてしはとのたまへば　（枕草紙）

といふやうな用言について終止する例はまだない。「はも」といふ形で、

かくのみにありけるものを芽子が花咲きてありやと問ひし君波母（ハモ）　（三・四五五）

の如く用ひるのがあるだけである。「も」は文の終にあつては終止形をうけて、味歎的に

つまやさぶしく於母保由倍斯母（オモホユベシモ）　（五・七九五）

竹の林に鶯奈久母（ナクモ）　（五・八二四）

の如く用ひられる。尤も次のやうな例もあるから、終止してゐる所をうけるので、終止には限らないのであらう。

秋の夜を長みにかあらむなぞここば伊能禰良要奴毛（イノネラエヌモ）一人ぬればか　（十五・三六八四）

家にして結ひてし紐を解きさけず思ふ心を誰か思良牟母（十七・三九五〇）

「は」「も」の二つは文中にあつて係となつてゐても、別に終止に影響をしないが、「ぞ」以下のものは夫々影響を及ぼすことは、後とかはりがない。たゞ「こそ」の場合、形容詞及び形容詞的活用の助動詞にあつては、已然形をとらず連體形をとるのが、後世と違ふ點である。今それら係としての例はすべて省略する。

「ぞ」が終止に用ゐられる時は體言をうけるか、用言ならば連體形をうける。

秋さらば今も見るごと妻ごひに鹿なかむ山曾　高野原のうへ（一・八四）

吾が衣摺れるにはあらず高松の野邊行きしかば芽子の摺類曾（十・二一〇一）

「なも」は後の「なむ」であるが、平安朝でも歌には殆ど係として用ひられない語であつて、萬葉集でも用ひられてゐない。

何時奈毛不戀有登者あらねどもうたて此の頃戀し繁しも（十二・二八七七）

この初句をこのまゝ訓めば、唯一の例となる。終止に用ひられると、他に……あつてほしいと望むやうな心持をあらはすのであるが、はつきり「なも」とあるのは東歌だけで、その他は「なむ」となつてゐる。

上野乎度の多杼里が川路にも兒らは安波奈毛一人のみして（十四・三四〇五）

うちなびく春ともしるく鶯は植木の樹間を奈伎和多良奈牟（二十・四四九五）

この例の如く、動詞の未然形をうけるのであるから、連用形をうける助動詞の「なむ」――時の「ぬ」に「む」のついたもの――終止形をうける「なむ」「なも」――共に東歌で「らむ」の意――と區別することが出來る。

「こそ」が終止に用ひられると連用形をうけて冀望をあらはす。

ぬば玉の夜の夢にをつぎて美延許曾（ミエコソ）（五・八〇七）

梅が花散らず阿利許曾（アリコソ）思ふ兒が爲（五・八四五）

但しこれは動詞の場合だけで、形容詞の場合はさうならぬやうである。

わたつみの豐旗雲に入日さし今夜の月夜清明己曾（アキラケクコソ）（一・一五）

この終は訓釋に二說あるが、このやうによめば下に「あらめ」を略したいひ方と見ねばならない。また「ほる」といふ動詞は特別で、

栲繩の長き命をほしけくは絶えずて人を欲見社（四・七〇四）

の終は「みまくほりこそ」と訓んで、

言とはぬ木すら春さき秋づけばもみぢ散らくは常乎奈美許曾（ツネヲナミコソ）（十九・四一六一）

と同じく、單に强めただけのものと解すべきである。（「萬葉集講座」第三卷二二四頁以下參照）

「や」「か」が終止となる場合には二つの場合がある。甲の場合には「や」は終止形をうけ、體言をうけないが、「か」は連體形をうけ、また自由に體言もうける。乙の場合は「や」「が」共に已然形をうけて反語となるのであるが、「か」の用例は極めて少く、且つ「や」「か」共に一つづつの例外がある。已然形といつても「め」をうけて、「めかも」「めや」「めやも」となるのが普通で、

妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れて於毛倍也（オモヘヤ）（十五・三六〇四）

の如きは少い。

甲の場合「や」は問をあらはし、反語となることもある。「か」は疑をあらはし、反語となり、又咏嘆をあらはすこともある。又「ぬか」「ぬかも」といふ形で希求を表はすこともある。

不飽八(アカズヤ)妹と問ひし君はも　(十一・二七〇六)
かく立つ浪に船出可爲八(スベシヤ)　(九・一七八一)
夜渡る月に競敢六鴨(キホヒアヘムカモ)　(三・三〇二)
今夜のみ飲まむ酒可毛(サケカモ)　(八・一六五七)
くるしくも零りくる雨可(アメカ)　(三・二六五)
西の山邊に關も有糠毛(アラヌカモ)　(七・一〇七七)

なほ詳細は「國語國文の研究」第二十二號の拙稿を參照願ひたい。

「な」は禁止をあらはす。係となつてゐる時は連用形で結ぶ。後世は「そ」を應じさせるが、この當時は必ずしもさうでない。終止の時は終止形をうける。

わが故に思ひ奈夜勢曾(ナヤセソ)　(十五・三五八六)
あれ無しと奈和備(ナワビ)わがせこ　(十七・三九九七)
いたづらにあれを知良須奈(チラスナ)　(五・八五二)

(四)　接續助詞

「ば」「とも」「ど」「ども」「を」「に」がこれに入つてゐる。山田博士は「て」は複語尾（ここにいふ助動詞）とみて居られるが、既に變質してゐるからここに入るべきであらう。

「ば」は未然形をうける場合と已然形を受ける場合とあり、前者には「とも」が相對し、後者には「ど」「ども」が相對す。已然形をうける場合の「ば」はつけないで用ひられることがあり、この「ば」は係助詞の「は」の變つたものと考へられることは前に述べた（八五頁）。

かくばかり戀乍不有者（コヒツヽアラズハ）高山の岩根しまきて死なましものを　（二・八六）

これは從來「あらずば」とよんで「あらんよりは」の意とせられてゐたが、これは接續助詞の「ば」でなく、係助詞の「は」で、意味は、「戀ひつゝあらず……」と見るべきだと、橋本進吉氏が語法的に解決せられた（「國語と國文學」第二卷第一號）のに從ふべきである。

「を」「に」は次の如き例である。

足引の山も知可吉乎（チカキヲ）霍公鳥月立つまでに何か來鳴かぬ　（十七・三九八三）

思可（しか）の浦にいさりするあま家人の待ち戀ふ良牟爾（ラムニ）あかしつるうを　（十五・三六五三）

（五）終助詞

「が」「な」「ね」「に」があげられてゐる。

「が」は冀望をあらはす。「もが」「もがも」「しが」「てしが」といふやうな形で用ひられる。

石竹（なでしこ）のその花爾毛我（ニモガ）　（三・四〇八）

霍公鳥無かる國にも去而師香（ユキテシカ）　（八・一四六七）

「しか」「てしか」の場合は「か」は清音であるといふ說がある（「國語と國文學」第八卷第七號武田祐吉博士「しか」「てしか」考）。或は「もが」の方の「が」はそれから出たのであらうか。

「な」は未然形（形容詞及びその活用の助動詞を除く）をうけて、願ふ心持をあらはす。

出ではしり伊奈奈（イナナ）と思へど子らにさやりぬ　（五・八九九）

みちのなか國つ御神は旅ゆきもし知らぬ君を米具美多麻波奈（メグミタマハナ）　（十七・三九三〇）

「ね」も同樣である。他に誂ふる意をあらはすといはれる。

家きかな名告沙根（ノラサネ）　（一・一）

大殿の此のもとほりの雪奈布美曾禰（ナフミソネ）　（十九・四二二八）

これはこの形に限る特別な用法である。「に」はこの「ね」の音のかはつたものかといはれる。

なほ〳〵に家にかへりて業（なり）を斯麻佐爾（シマサニ）　（五・八〇一）

（六）　間投助詞

「や」「を」「よ」「ろ」「し」「い」「ゑ」「ら」「な」等がある。今各一例づつをあげるにとどめる。

石見乃也（イハミノヤ）高角山　（二・一三二）

三枝の中爾乎禰牟（ナカニヲネム）と　（五・九〇四）

籠毛與（コモヨ）み籠もち　（一・一）

をとめがともは乏吉呂賀聞(トモシキロカモ)　（一・五三）

世の中は空しきものと知る時子(シ)いよよます〳〵悲しかりけり　（五・七九三）

花待伊間爾(ハナマツイマニ)嘆きつるかも　（七・一三五九）

吾は左夫思恵(サブシヱ)君にしあらねば　（四・四八六）

安左乎良(アサヲラ)を麻笥(をけ)にふすさにうまずとも　（十四・三四八四）

花は知良牟奈(チラムナ)珠と見るまで　（十七・三九一三）

與へられた紙數を遂に超過してしまつたので終を急いだため、頗る變なものになつてしまつた。最初から十分の豫定を立てて、適當に進めなかつた罪は深くお詫びせねばならぬ。今から稿を改めることは時日が許さないのでやむを得ずこれで筆をおかせていただく。上古の國語として述ぶべき問題はこれで盡きた譯ではない。他日機を得てと思つてゐる。終に臨みこの執筆に際しお蔭を蒙つた多くの方々に深き感謝をささげたい。

（昭和八・七・一三）

昭和八年八月二十日印刷
昭和八年八月二十八日發行

國語科學講座
（第三回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社明治書院